



千葉県八千代市

妙見前遺跡 b 地点発掘調査報告書

- 急傾斜地崩壊対策工事に先行する埋蔵文化財発掘調査 -

2008.3

千葉県千葉地域整備センター
八千代市教育委員会



千葉県八千代市

みょうけん まえ い せき ち てん
妙見前遺跡 b 地点発掘調査報告書

- 急傾斜地崩壊対策工事に先行する埋蔵文化財発掘調査 -



2008.3

千葉県千葉地域整備センター
八千代市教育委員会





序 文

八千代市は千葉県北西部に位置し、從来から印旛沼と新川周辺に広がる台地上や低地の利を得て畑作、牧畜等農業を中心として発展してきました。他面、首都30キロ圏に位置していることから、昭和30年代以降は経済の高度成長化に伴い、首都圏の住宅都市としての性格を強めてきました。從来から通勤手段とされている京成電鉄線や新規参入した東葉高速鉄道沿線の住宅整備は整いつつありますが、本市都市計画の見直しにより、住宅建築の規制緩和が実施されました。このことにより、各駅周辺にやや距離を隔てた地域にも宅地造成や共同住宅建設の工事が及ぶようになりました。人口増加に伴い、住民受け入れのための行政サービスとして、窓口業務の多元化、各種イベントの主催・補佐、新川流域の公園化等様々な視点で施策を講じてきました。本市を住みがいのある街として、新しく移り住まわれた方々に第二の故郷として郷土意識を育んでいただけるような街づくりをこれからも推進してまいります。

今回の発掘調査の契機となった急傾斜地崩壊対策工事事業は、吉橋地区の急傾斜地について、防災上の安全対策として実施されたものです。傾斜面を緩やかにするため、上部に遺存する土塁や地下構造の詳細について発掘調査を実施しました。

調査は、平成16年から19年の4ヶ年に亘りましたが、その結果吉橋城関連と想定される土塁・堀、溝や当該期前後の遺構群が検出されました。城を隔てた地点において、これらの成果を得られたことは、吉橋城を考える上で有益な資料を提供できたと言えます。

本書を刊行するあたり、この報告書が本市の中世を考古資料を通じて考えるきっかけになっていただければ幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまでご指導・ご協力いただいた千葉県教育庁文化財課、千葉県千葉地域整備センター、八千代市をはじめ、関係諸機関の皆様に対して深く感謝いたします。また、発掘調査では、困難な状況下での作業に従事いただいた調査補助員の方々、整理作業に従事された整理補助員の方々にも併せてお礼申し上げます。

平成20年3月

八千代市教育委員会
教育長 萩原 康正



凡　　例

- 1 本書は、八千代市吉橋字妙見前1430 ほかに所在する妙見前遺跡 b 地点の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、平成 16 年度から 18 年度については八千代市遺跡調査会が、19 年度は八千代市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査・本整理作業は以下のとおり実施した。

確認調査

期　間　平成 17 年 3 月 1 日～3 月 22 日　期　間　平成 18 年 1 月 11 日～3 月 31 日

面　積　120m² /1,050m²

第 1 次本調査

面　積　300m²

担　当　森 竜哉

担　当　森 竜哉

第 2 次本調査

期　間　平成 19 年 2 月 22 日～3 月 30 日

第 3 次本調査

期　間　平成 19 年 10 月 5 日～11 月 26 日

面　積　300m²

面　積　180m²

担　当　森 竜哉

担　当　森 竜哉

本整理

期　間　平成 19 年 12 月 20 日～平成 20 年 3 月 25 日

担　当　森 竜哉

- 4 本書の編集は森が、執筆は第 2 章第 1 節の遺物については中野修秀が、それ以外は森がおこなった。
- 5 現場の遺構、遺物及び報告書掲載の遺物写真は森が撮影した。
- 6 本書の作成・刊行については、下記の整理補助員と森が協力してを行い、森が統括した。

池田瞳　野本拓矢　野中則子　山下千代子
- 7 出土遺物、実測図等の資料は、八千代市教育委員会が保管している。
- 8 本書の遺構番号は、11M を 1 号堀に変更した以外は発掘調査時の番号を使用している。
- 9 遺構・遺物の縮尺及びスクリーントーンの説明は個々の挿図に記載した。
- 10 本書使用の地形図等は、下記のとおりである。

第 1 図　国土地理院発行 1/50,000 「佐倉」

第 2 図　八千代市発行 1/2,500 八千代都市計画基本図

第 3 図　八千代市発行 「八千代の歴史」資料編 原始・古代・中世 付図
- 11 発掘調査から整理作業において下記の諸氏・機関にご指導、ご協力いただきました。記して感謝いたします。(敬称略)

千葉県千葉地域整備センター　井上哲朗　千葉県教育庁文化財課　八千代市教育委員会



本 文 目 次

序 文	
凡 例	
第1章 序説	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
第3節 遺跡の位置と環境	1
第2章 検出された遺構と遺物	7
第1節 中世以前	7
第2節 中世	13
第3章 まとめ	34

挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡分布	2
第2図 遺跡周辺地形図	4
第3図 吉橋城跡地形測量図	5
第4図 調査区現況測量図	6
第5図 09P.10P.11P.12P.13P平面実測図	7
第6図 妙見前遺跡b地点遺構配置図	8・9
第7図 ピット出土遺物	10
第8図 遺構外出土遺物(1)	11
第9図 遺構外出土遺物(2)	12
第10図 トレーン・エレベーション設定図	14
第11図 1号土壘・1号台状遺構土層断面図	15
第12図 2号土壘土層断面図	16
第13図 調査区北側の遺構配置図	17
第14図 調査区南側の遺構配置図	18
第15図 02M平面実測図	19
第16図 04M平面実測図	20
第17図 12M・13M平面実測図	21
第18図 1号堀平面実測図	22
第19図 05P・14P平面実測図	23
第20図 07P・08P・15P平面実測図	25
第21図 04P平面実測図	26
第22図 中世遺物(1)貿易陶磁漁戸・美濃小皿・瓶子	27
第23図 中世遺物(2)常滑片口鉢・甕	28
第24図 中世遺物(3)常滑甕・陶器口縁	29
第25図 中世遺物(4)土器かわらけ・擂鉢・内耳・火鉢	31
第26図 中世遺物(5)石製品 砥石・茶臼・加工痕跡の石	32
第27図 中世遺物(6)石製品 加工痕跡の石・石器等	33
第28図 中世遺物(7)金属製品 銭貨	34

写 真 図 版

写真図版 1～8 現況・遺構
写真図版 9～13 遺物

調査抄録



第1章 序 説

第1節 調査に至る経緯

平成14年7月、千葉県千葉地域整備センター（以下「事業者」という。）から吉橋地区急傾斜地対策工事の目的で、当該地に埋蔵文化財の所在にかかる照会文書が八千代市教育委員会（以下「市教委」という。）宛て提出された。照会地はNo.133妙見前遺跡の範囲内であり、過去の隣接地及び周辺地での調査成果、当該地での土塁の遺存等千葉県教育委員会（以下「県教委」という。）に副申し、三者による現地踏査を実施した。結果として、地上遺構の土塁や散布遺物の状況から遺跡が所在する旨回答を伝達した。事業としての重要度から、発掘調査による記録保存が前提として協議が進められ、準備の整った平成17年3月に確認調査を実施した。

確認調査は、事業者との協議から八千代市遺跡調査会（以下「調査会」という。）が委託事業として実施した。結果として、中世土塁2条、土手1条、粘土貼り土坑2基等の成果をあげた。対象面積1,050m²の内、780m²について協議が必要な旨事業者に通知した。その後の協議によって、工事施工区に合わせた3カ年で本調査を実施する取り決めをおこなった。

本調査は、平成17・18年度は調査会の委託業務として、19年度は八千代市と事業者の委託契約後、市教委による直管事業として実施した。

第2節 調査の方法と経過

確認調査の知見から、耕作土下ないし表土下は褐色土の客土が部分的に堆積し、その下層にソフト・ハードドーム層という層序になっていた。遺構の確認はこの面でおこなった。また、地上遺構の土塁、土手については、現況測量と現況写真撮影後、調査区内でトレントを設定し、土層断面図の作成をおこなった。調査経過は、平成17年度については地上遺構現況測量図作成、1号土塁・04P・05P・02M溝状遺構調査、平成18年度は1号台状遺構・2号土塁・07P～13P調査、平成19年度は1号塁・12M・13M・15P調査により現場における作業をすべて終了した。

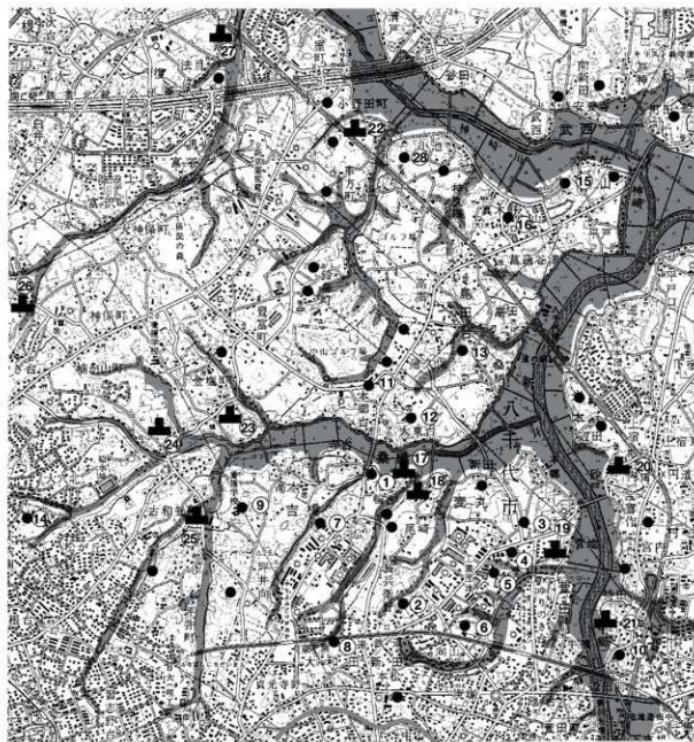
第3節 遺跡の位置と環境

八千代市は千葉県の北半を占める下総台地上に位置する。台地の標高は縦して20～50mであるが、市域では20～30mである。市内での標高の最高点は南西部の39.1m、最低点は北部の神崎川と新川の合流地点の1.1mである。台地の形状は、おおまかに南西部で高く、東から北に向って高度を減じている。このため、河川の流れる方向も東ないし北となる傾向がみられる。台地を開析する河川は、市域中央を北流していた新川を核として、東流して新川に合流する神崎川、桑納川、高津川、北流して花見川と新川の分水嶺付近に至る勝田川、北流して印旛沼南岸に至る井野川に分類される。また、台地はおおむね3枚の段丘からなり、標高25～30mの下総上位面、標高20～25mの下総下位面、標高11～15mの千葉段丘面に分けられる。5m以下は沖積地である。市内の遺跡はこの3枚の段丘上に位置し、妙見前遺跡は桑納川南岸の下総下位面に占地している。

本遺跡では、縄文時代中期加曾利E式期及び中世の城館関連遺跡に想定される遺構群が検出されていることから、市域西部及びその周辺の縄文時代中期及び中世の遺跡について概観していくこととする。

縄文時代中期

中期全体をみると、八千代市域では近年までの調査事例から、中期初頭五領ヶ台式期から前半の阿玉台式期については遺構・遺物が比較的検出されている。中葉の阿玉台式後半から後半の加曾利E式前



第1図 周辺の遺跡分布

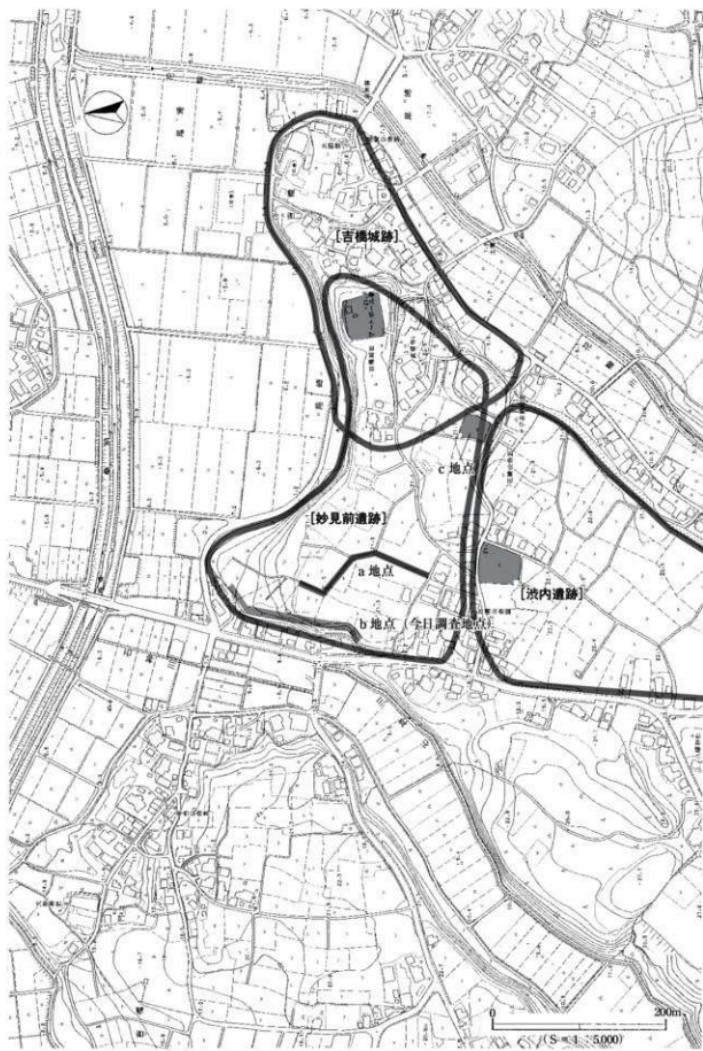
- ①妙見前遺跡 ②長兵衛野南遺跡 ③麦丸台遺跡 ④ヲサル山遺跡 ⑤ヲサル山南遺跡 ⑥向山遺跡 ⑦西内野遺跡 ⑧イノ作南遺跡 ⑨八王子台遺跡 ⑩浅間内遺跡 ⑪追分遺跡 ⑫桑橋新田遺跡 ⑬桑納前畠遺跡 ⑭海老ヶ作貝塚 ⑮佐山貝塚 ⑯真木野向山遺跡 ⑰吉橋城跡 ⑱尾崎館跡 ⑲飯綱若跡遺跡 ⑳米本城跡 ㉑正覺院館跡 ㉒小野田城跡 ㉓金堀城跡 ㉔楠ヶ山館跡 ㉕坪井城跡 ㉖八木ヶ谷城跡 ㉗長殿城跡 ㉘作山遺跡



半にかけては遺構・遺物共に減少し、後半から末葉の加曾利E式期には、遺構・遺物がまた増加する傾向が伺える。また、市域外を含めた遺跡の立地は、神崎川、新川、桑納川を臨む台地上縁辺部及び各河川に至る支谷の中流域、谷頭部分と多様である。調査例としては、初頭から前半では上谷遺跡（欄外・神野地区東側）で五領ケ台式期の堅穴住居跡3軒・土坑6基が、新林遺跡c地点（欄外・村上地区東側）でも同期の堅穴状遺構1基が検出された。④のヲサル山遺跡では阿玉台式期の住居跡1軒、堅穴状遺構2基等が、⑤のヲサル山南遺跡では同期の住居跡8軒、堅穴状遺構1基、土坑7基が、⑥の向山遺跡、⑦の西内野遺跡でも同期の土坑群が、⑧のヲイノ作山遺跡・⑩の桑橋新田遺跡では阿玉台式土器が出土した。⑪の浅間内遺跡では阿玉台式期の土坑群が120基検出されている。阿玉台式後半から加曾利E式前半の遺跡は⑨の八王子台遺跡で土坑群が、⑭海老ヶ作貝塚で阿玉台式終末から加曾利E式初頭の住居跡群が検出されている。加曾利E式後半から終末では、②長兵衛野南遺跡・⑯真木野向山遺跡で各々住居跡2軒、3軒が、③麦丸台遺跡・⑪追分遺跡・⑮佐山貝塚で同期の遺物が、⑬の桑納前畠遺跡で土坑1基が検出された。以上、調査事例を中心概略とした。

中世

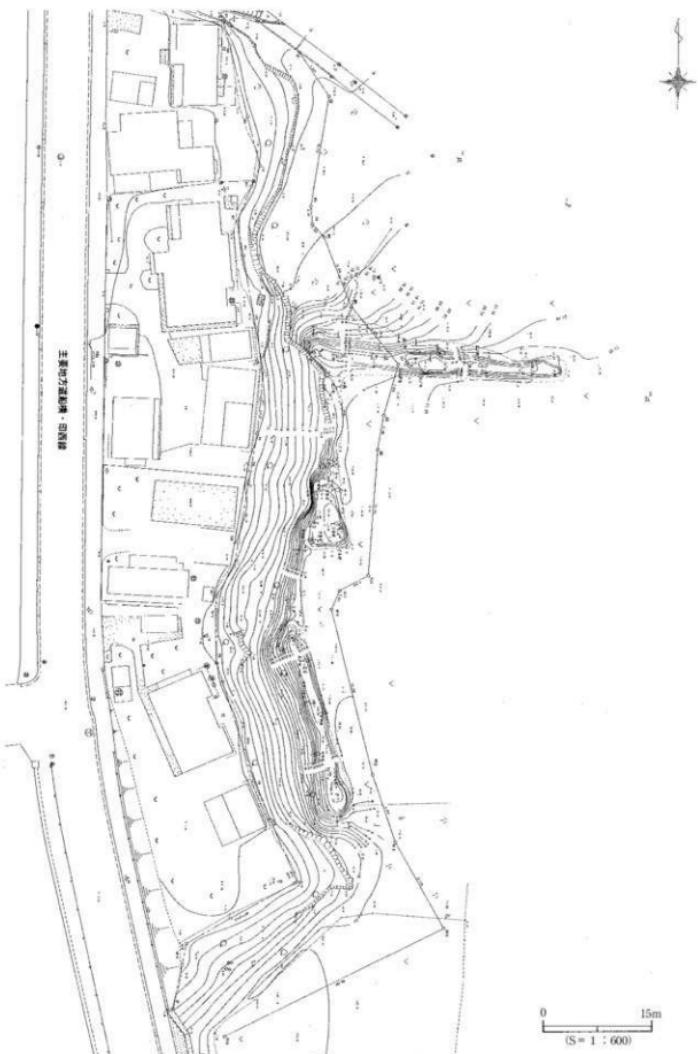
本遺跡周辺の中世城館跡については、城館の基本立地に倣い、三方を谷・河川に囲まれた舌状台地上に位置している。桑納川水系では、⑪吉橋城跡とほぼ対面に⑯尾崎館跡、北岸に⑯金堀城跡、⑭楠ヶ山館跡、南岸のやや谷奥に坪井城跡が所在する。吉橋城跡については後段触ることとするが、尾崎館跡は土壘・堀を東及び南に配置し、長方形状の郭を持つ。吉橋城の堀底道に隣接しており、明らかに根古屋として位置づけられる。金堀城跡は土壘が方形に巡っていたが、その後の土地の改変により詳細は不明である。楠ヶ山館跡は掘・緩堀・土壘・櫓台等により構成される。主郭を取り囲む形で3郭が遺存する。時期は、緩堀の存在や虎口の形態から戦国期に比定される。また、北西500mの同台地上の楠ヶ山十三仏塚跡遺跡では野馬土手状遺構が検出され、中世に遡る可能性が指摘されている。新川流域では、西岸に⑯飯綱岩跡遺跡、東岸に⑯米本城跡、⑯正覚院館跡が所在する。米本城跡は三郭からなる直線連郭式の城である。土取りで主郭部分は失われているが、南北300m、東西150mの規模をもつ。根古屋、りゅうげ等の地名や井戸、腰郭、虎口等の施設、防御性の高い主郭・II、III郭の性格等戦国期の所産と想定される。正覚院館跡は舌状台地先端部に位置し、二郭からなる防御部分とその東側に一段低い館部分と想定される空間から構成される。南北120m～160m、東西120mの規模で、台形状の平面形をもつ。2回に亘る調査の成果から、14世紀から16世紀に至る年代観が想定される。程近い⑪浅間内遺跡では、2条の溝に区画された範囲内に地下式坑・火葬施設・土坑等が検出された。遺構内からは茶臼・瀬戸、常滑等陶器・内耳土器等の生活遺物が出土しており、正覚院館跡との有機的関係が想定される。神崎川流域では、南岸の台地先端部に⑯小野田城跡、支谷奥に⑯八木ヶ谷城跡、⑯長殿城跡が所在する。小野田城跡は、明確な二郭と距離を隔てた南側に土壘・堀等の防御施設によって構成される。東西150m、南北160mの規模で、方形を意識した平面形である。小野田城跡の谷を隔てた東側は八千代市にあたるが、この台地上に⑯作山遺跡が所在する。15～16世紀のT字形火葬施設・土坑墓群が検出されており、土地利用上の有機的関係が想定される。⑯八木ヶ谷城跡は、開発によって消失した部分が多いが、土壘・緩堀等が確認されたという。位置的には谷奥にあたり、神崎川よりも⑯楠ヶ山館跡等の桑納川側を意識した占地となっている。また城域縁辺部からは常滑窯こね鉢の表採、西側隣接地の八木ヶ谷王子遺跡からは、中世墓跡と板碑が検出されており同台地上の土地利用を考える点において興味深い。



第2図 遺跡周辺地形図



第3図 吉橋城跡地形測量図



第4図 調査区現況測量図



第2章 検出された遺構と遺物

第1節 中世以前

本遺跡では、遺構では縄文時代中期加曾利E式期のピット5基が検出された。遺物では、縄文時代早期から後期にかけての土器及び石器で、土器は中期加曾利E式が中心に出土している。出土地点は、土壠積み上げ土中や堀・溝の覆土中が主体で、中世の土木工事による面的カランが顕著である。おそらく同時期の集落が展開していたと想定される。その他、図示していないが、弥生時代後期の腰廻部片、古墳時代後期の土師器环・甕片等が出土しており、該期の遺構群が存在したと想定される。

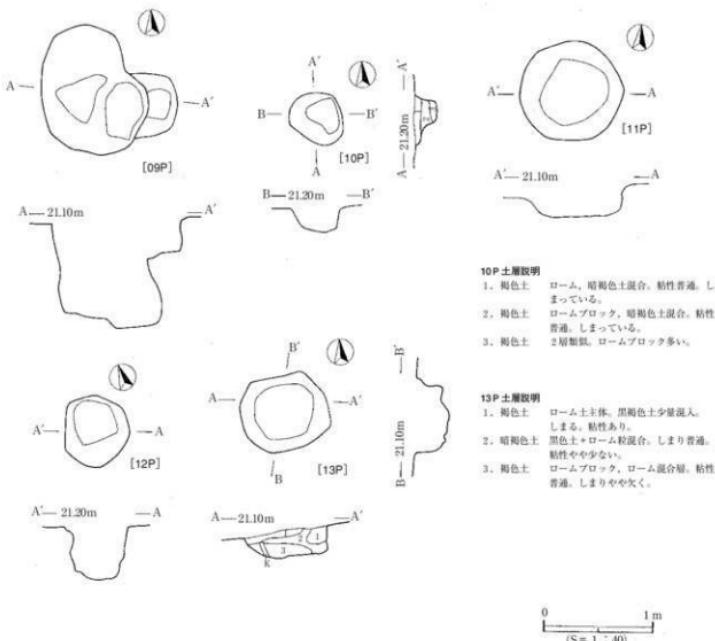
09P(第5図)

規模・長軸方位 2口の重複からなる平面形で $1.26\text{m} \times 1.2\text{m}$ × 深さ $0.8\text{m} \sim 1.0\text{m}$ の規模をもつ。

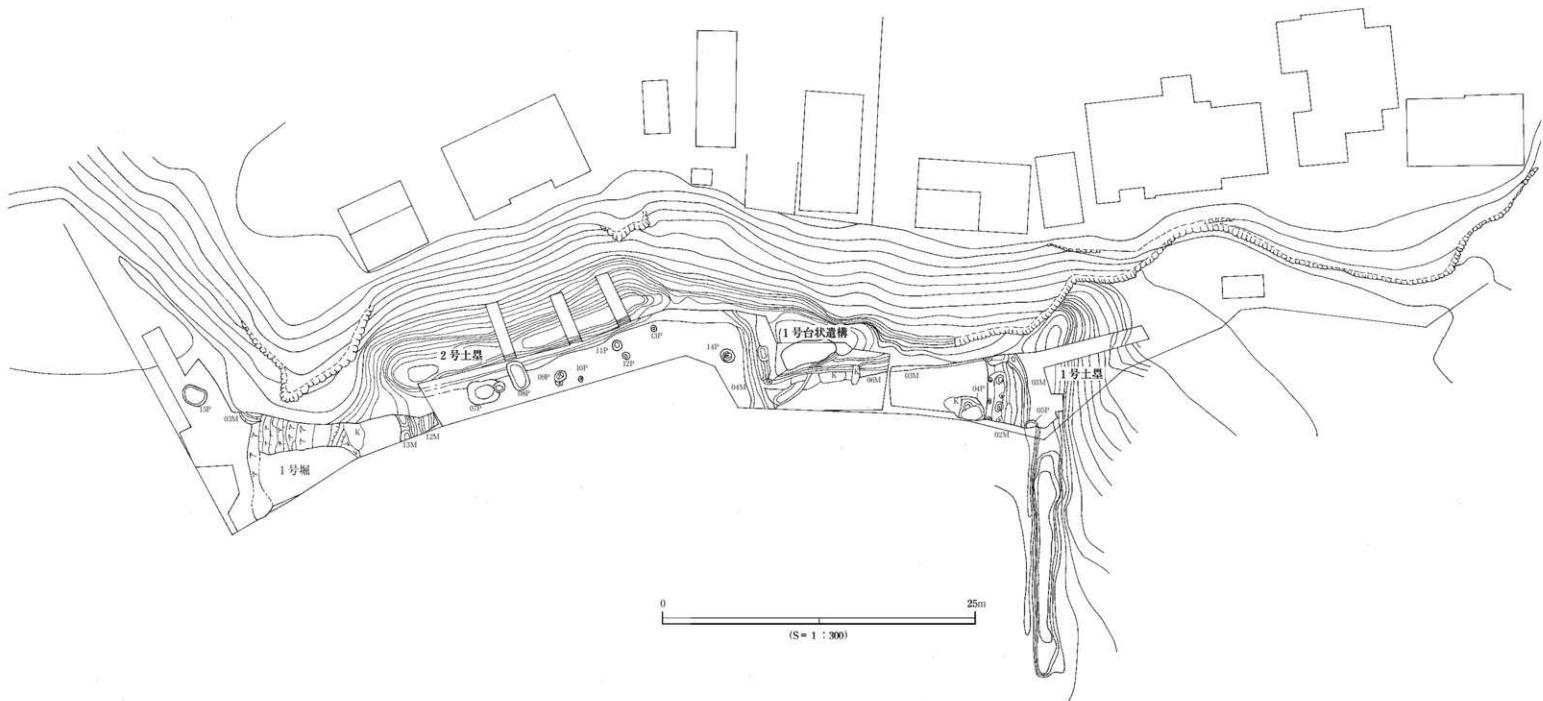
壁・底面の状態 底面は3段からなる。東側で深さ 0.3m の浅い底面をもつ。壁面は全体に直立気味に立ちあがっている。

覆土の状態 暗褐色土を主体とした土層で、粘性・締まり共に普通である。

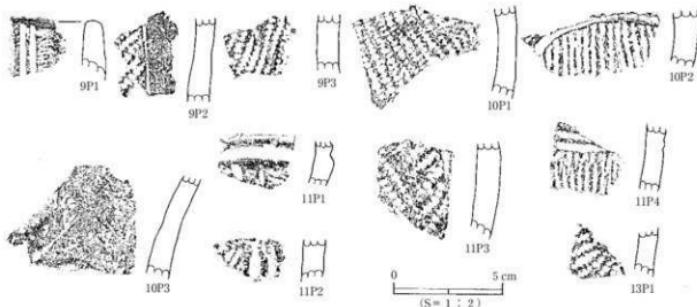
帰属時期 遺物から縄文時代中期に想定される。



第5図 09P, 10P, 11P, 12P, 13P平面実測図



第6図 妙見前遺跡b地点遺構配置図



第7図 ピット出土遺物

1OP (第5図)

規模・長軸方位 ややいびつな楕円形で、 $0.5\text{ m} \times 0.5\text{ m} \times \text{深さ } 0.2\text{ m}$ の規模をもつ。

壁・底面の状態 底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに立ちあがっている。

覆土の状態 褐色土を主体とした土層で、粘性・締まり共に普通である。

帰属時期 遺物から縄文時代中期に想定される。

11P (第5図)

規模・長軸方位 ほぼ円形で、 $0.9\text{ m} \times 0.92\text{ m} \times \text{深さ } 0.21\text{ m}$ の規模をもつ。

壁・底面の状態 底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに立ちあがっている。

覆土の状態 暗褐色土を主体とした土層で、粘性・締まり共に普通である。

帰属時期 遺物から縄文時代中期に想定される。

12P (第5図)

規模・長軸方位 ほぼ円形で、 $0.9\text{ m} \times 0.92\text{ m} \times \text{深さ } 0.21\text{ m}$ の規模をもつ。

壁・底面の状態 底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに立ちあがっている。

覆土の状態 暗褐色土・褐色土にロームブロックを混入した土層で、やや締まりを欠く。

帰属時期 出土遺物はなく不明であるが、覆土の状態から縄文時代か。

13P (第5図)

規模・長軸方位 楕円形で、 $0.86\text{ m} \times 0.68\text{ m} \times \text{深さ } 0.28\text{ m}$ の規模をもつ。

壁・底面の状態 底面はやや凹凸が見られるが、平坦面を意識している。壁はやや直立に立ちあがる。

覆土の状態 暗褐色土・褐色土にロームブロックを混入した土層で、部分的にやや締まりを欠く。

帰属時期 遺物から縄文時代中期に想定される。

ピット出土遺物 (第7図 図版9)

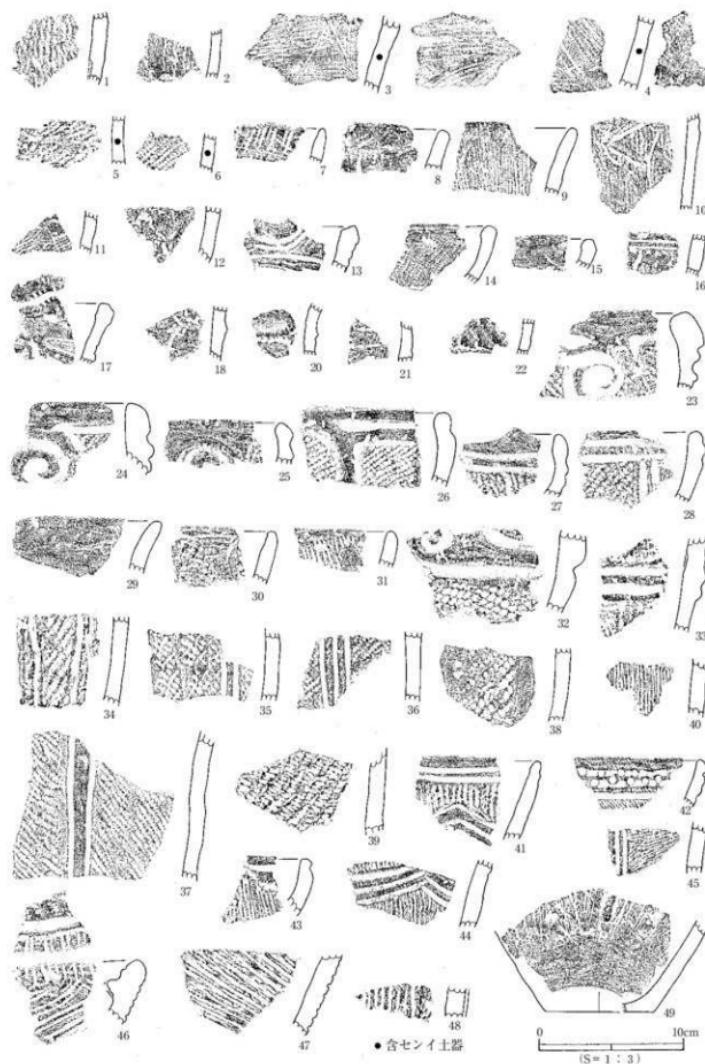
09P 1は細撚糸を地文に、口縁直下から3本1組の懸垂施す。2は磨消懸垂文、3は地文縄文。

10P 1は地文縄文の脣部片で、使用原体は前々段反撲。2は撚糸L地文の連弧文土器。3は脣下半。

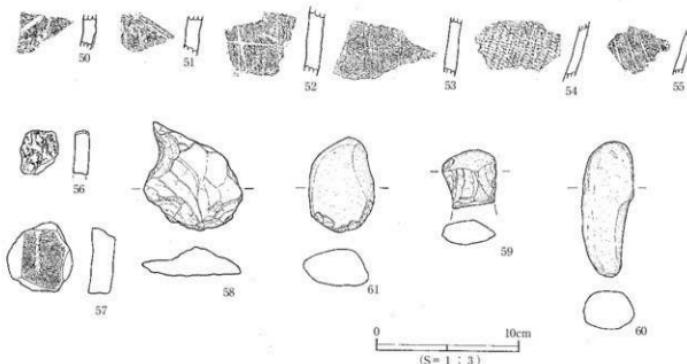
11P 1は脣部に磨消懸垂文、2は地文縄文に懸垂文。3は地文縄文の羽状施文、4は連弧文土器。

13P 1は地文縄文の脣部片で、使用原体は2段R L。ピット群の時期は、09P-11Pが加曾利E II式期。

10P も概ね加曾利E II式期と認定でき、13Pは大枠での加曾利E式期の所産と捉えられる。



第8図 遺構外出土遺物(1)



第9図 遺構外出土遺物(2)

遺構外出土遺物（第8・9図 図版9・10）

1・2は燃系文系土器。いずれも燃系施文型で、燃系Rを1は条間密接施文し、2は条間が疎らとなる。時期的には、1が夏島式、2は稻荷台式に比定される。

3・4は条痕文系土器。内外面に貝殻条痕を施す。3は格子文を描き、鶴ヶ島台式～茅山下層式。

5・6は黒浜式土器。いずれも地文縄文を施した胴部片で、使用原体は2段R L。

7～10は浮島・興津式土器。7は口縁部に斜行する条線帯を施した浮島Ⅲ式。8は貝殻復縁文を垂直施文した興津Ⅰ式。9は縦位の条線を施文。10は1段Rを地文に、平行沈線で意匠を描いた浮島Ⅰ式。

11・12は前期末葉～中期初頭の縄文系粗製土器。12は縦位の結節縄文を施しており、中期初頭か。

13～16は五領ヶ台式土器(八辺式)。16は平行沈線による区画文に円形刺突を沿わせた八辺式Ⅲ期。その他の口縁部資料は八辺式IV期に比定される。14・15は胎土に雲母・石英粒子がや目立つ。

17・18・20～22は阿玉台式土器。17は波状線。隆線で枠状形区画文を描き、区画内の隆線に沿って単列の有筋線文を施した阿玉台I b式。その他も阿玉台I b式に比定されるもので、いずれの胎土にも雲母が少なからず含まれており、いわゆる「雲母混入型」の資料として把握される。

23～40は加曾利E式土器。このうち、23～26・32～38はキャリバー形深鉢で、主要な器種。23～25は、口縁部文様帶の主文様である渦巻文と、副文様の楕円形区画文がわかる資料で、加曾利E I式。26はやや後出の資料。34～38のうち、胴部磨消懸垂文の確立していない36までがE I式で、37はE II式、38はE III式。30・31・40は粗製土器で、ほぼE I式に伴う。30は地文縄文のみ、31は地文燃系、40は地文条線である。39は地文縄文の胴部片で、使用原体は前々段反燃。この他、32・33は地文縄文3段R L R L、35は地文縄文が「正反の合」で、基本的に2段R Lが主体の中、光彩を放っている。

41～45は連弧文土器。地文は41・42・44が燃系Lで、他は条線。42の口縁部文様帶は交互刺突文。

46～49は曾利系土器。所謂「重弧文系」のローカルナイズされたもので、46は比較的原型に近い。

50は称名寺式、51～53は堀之内I式、54は加曾利B式の粗製土器、55は姥山式の粗製土器である。56～57は土製品。56は土器片鍤、57は土器片円盤。

58～60は石器。58・59は打製石斧で、58は分銅形、59は撥形。60・61はハンマー・ストーン。

全体を通じ、加曾利E式土器が最多で、かつ破片が大きい。同期の集落が存在していた可能性が高い。



第2節 中世

本遺跡は、これまでに3地点の確認ないし本調査を実施している(第2図参照)。a地点は、平成10年1月に農道舗装の関連で確認調査を実施した。その結果、中世堀跡1条・溝跡6条・地形整形遺構が各トレンチに見られた。堀の規模は幅は不明であるが、深さは2.0～2.2mである。遺物は縄文中期から後期の土器片・石器や堀跡内から常滑窯片・砥石片が出土した。c地点は、宅地造成の関連で平成17年6～9月に確認及び一部本調査を実施した。その結果、中世地下式坑2基・粘土貼り土坑1基・溝状遺構8条・掘立柱建物跡ないし土坑と想定される小穴が多数検出された。遺物は陶磁器・茶臼・砥石・錢貨が出土した。b地点は後述する。

南隣接地の渋内遺跡、東隣接地の吉橋城跡で各1地点の確認ないし本調査を実施している(第2図参照)。渋内遺跡は、昭和58年2月に畠地の天地返し及び宅地造成にかかる関連で確認・本調査を実施した。その結果、地下式横穴11基・溝状遺構1条・土坑1基が検出された。遺物は中世を中心とした常滑こね鉢・土器擂鉢・内耳上器・かわらけ・錢貨(洪武通宝)・板碑片・アカニシテ縄文時代早・後期、弥生時代後期の土器片が少量出土した。吉橋城跡は、昭和61年11月ゲートボール場造成工事に関連して確認調査を実施した。該地は本城I郭内に位置する。調査の結果、溝状遺構10条・ピット状遺構42基が検出された。時期の異なる掘立柱建物跡及び柵列と想定される。遺物は陶磁器を中心に出土している。吉橋城跡の概要(第2・3図)

妙見前遺跡・渋内遺跡と同一台地上を概観してみると、吉橋城跡を意識すべき要素が強い。本城は巨視的には、北に桑納川、東に花輪川、西に石神川を臨む舌状台地先端部に位置する。曲輪は明確に把握されているところでは、北側の現在ゲートボール場となっているI郭とその南側の貞福寺境内となっているII郭からなる。土壘・空堀に区画された各曲輪の規模はI郭で60m×90m、II郭で70m×110mの各々不整長方形で、I郭では南側に虎口、北側に縱堀・横矢折り、II郭では南側に横矢折り等の施設がみられる。中核となる部分は前述した2郭であるが、I郭東側の舌状部もこの部分の北側および東側の等高線を観察する限り防衛上の施設と言えよう。

ここで全体に目を移してみると(第2図参照)、西350mに位置する妙見前遺跡a・b地点にいたる北側斜面部の傾斜が人造的であること、南西300mに位置する渋内遺跡の遺構の特殊性が際立つこと等城域としての土地利用が広範囲に及ぶことが想定されるのである。

b地点の遺構概要(第4・6図)

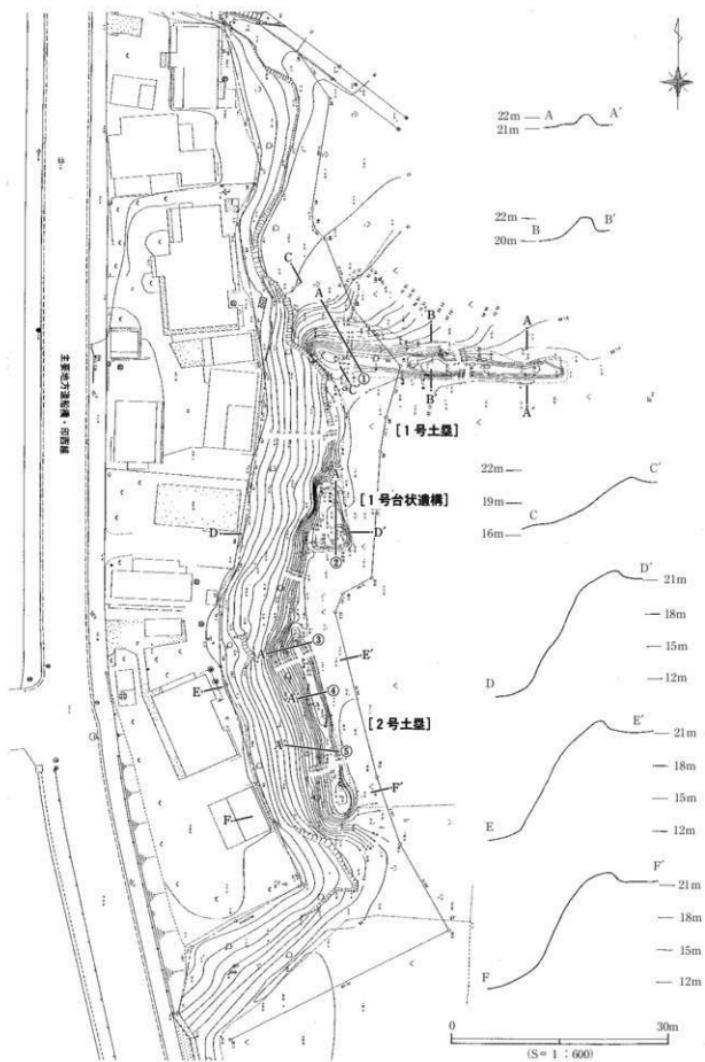
調査前の現況では(第4図参照)、地上遺構として1号土壘(北側)・1号台状遺構(中央)・2号土壘(南側)と2号土壘南側に接して窪んだ地形上の変化(1号堀)が観察できた。

検出された地下遺構は(第6図参照)、地下式坑1基(04P)・火葬施設2基(05P・14P)・粘土貼り土坑1基(07P)・土坑2基(08P・15P)・1号台状遺構周辺に溝状遺構5条(06M～10M)・本遺跡区画溝状遺構4条(02M・04M・12M・13M)・1.2号土壘間連の堀1条(1号堀)である。以下、地上遺構・地下遺構の各々について詳細を述べていく。

地上遺構

1号土壘(第10・11図 図版1)

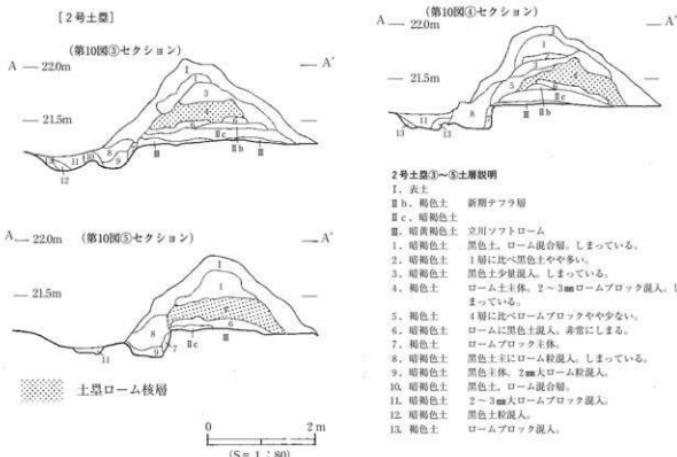
昭和52年刊行の『八千代市の歴史』通史編において既に知られていた土壘で、ほぼ東西方向に直線で遺存長36m、幅(上段部)1m、敷(下端部)5m、高さは東端で1.1m、西端で2.5mの規模をもつ。遺存状態は西端部で、崖による侵食を受け崩落している。また土壘上の樹木によるカクランはここ100年程度のことであるが、耕作地の拡張に伴う土壘の取り崩しは著しいと想定される。土壘頂部の標高は



第10図 トレーンチ・エレベーション設定図



第11図 1号土壌・1号台状造構土層断面図



第12図 2号土壁土層断面図

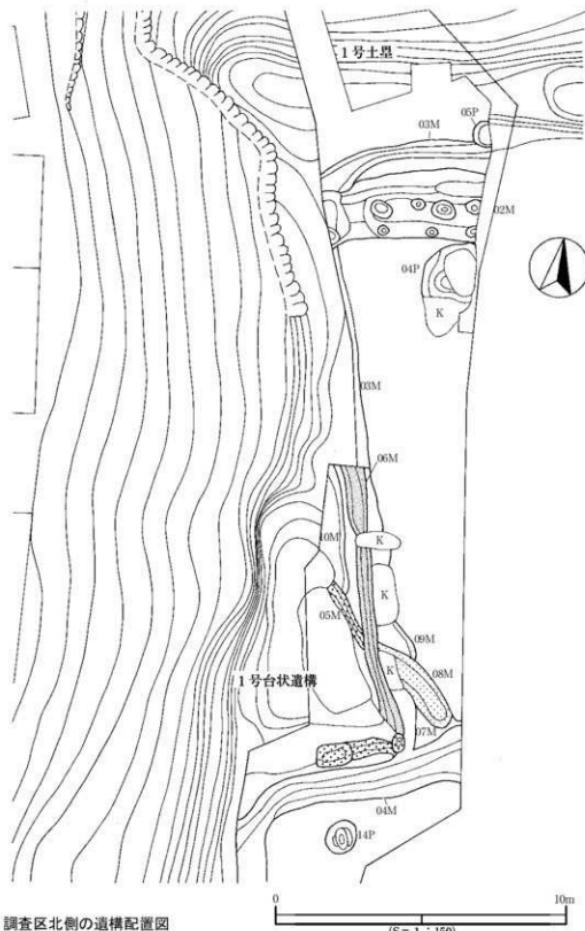
東端で 22 m、西端で 21.5 m と緩やかに傾斜しているが、西部分の元々の地形上の標高が低い点を考慮すると、より高く盛られていることがわかる。土壠の北側を城外とすると、敵からみた土壠による威圧は圧倒的だったと思われる。構築方法は、第 11 図を参考にすると、ソフトローム層を基盤層として、6～12 層を平坦に盛り上げた後、5 層を核として 3.4 層を斜め方向に、1.2 層を上部に積み上げている。特に 4 層は強く締まっている。総じて、黒色土の踏み締め・ローム土・ローム+黒色土（暗褐色土）の積み上げにより構築される。

1号台状遺構（第10・11図 図版1）

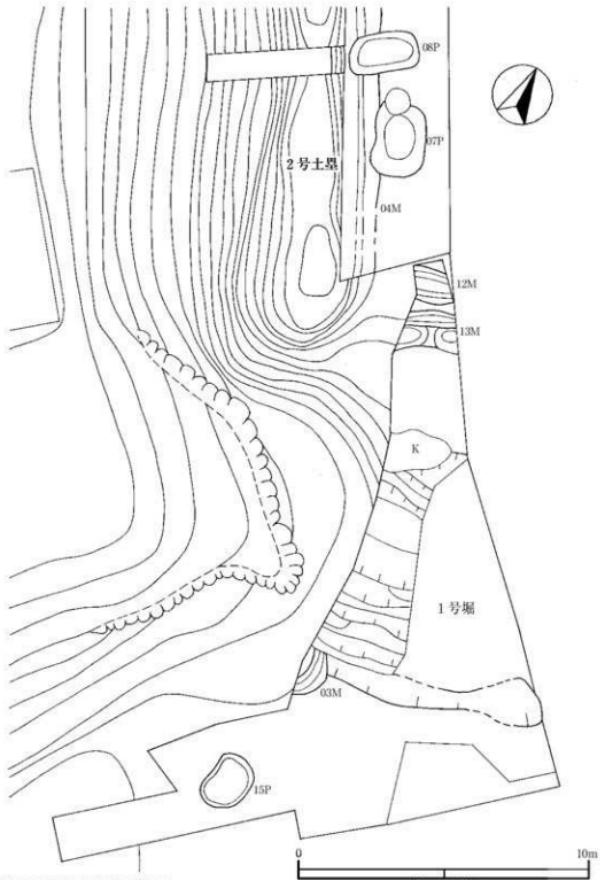
1号土壘と2号土壘の中間に位置する。平面形はややいびつな長方形で、 9×5 m、高さは現況で0.8 ~ 1.0 mの規模をもつ。構築は第11図を参考にすると、ソフトローム面を基盤層として、1~3層を踏み締めながら積み上げている。北方向からの攻撃を意識しており、桑納川を視野にいたる檜台としての性格が想定される。

2号土壁(第10・12図 図版1)

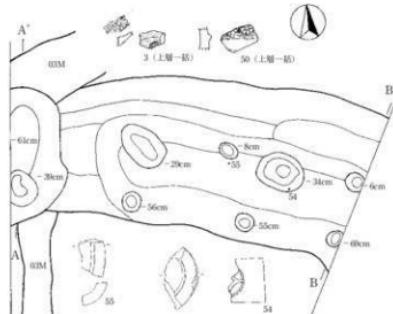
1号台状遺構に10mを隔てた南側に遺存する。南北方向に直線で遺存長28m, 墓（上段部）1.3m, 敷（下端部）5m, 高さ1.1mの規模をもつ。遺構の構築方法は、崖際部分を旧表土下で整地し、上層に暗褐色土（6層）で踏み固める。上部にローム土を核として、更に1～3層をのせる。東側は、幅0.8m・深さ0.4mの溝（04M）を7～10層（8層を主）で埋め戻して補強している。1号台状遺構と本土堤の間に、土壁の途切れた部分が見られるが、トレンチによる精査でも溝の遺存や土壁にかかる痕跡は見つかず、当初からなかった可能性が高い。西側眼下の斜面は、今回の調査対象となった急傾斜地対策工事の契機となっているが、中世段階の普請（土木工事）による急傾斜化の可能性が2号土壁の設置と共に関連していると考えたい。遺物は盛土内から古瀬戸片が出土している。



第13図 調査区北側の造構配置図

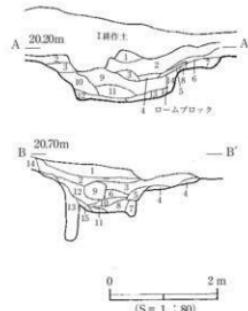


第14図 調査区南側の遺構配置図



02MA-A' 開土層説明

1. 初褐色土 黒色土。ローム混合。粒子細かい。しまり普通。
2. 初褐色土 I初期組。やや黒色土多い。
3. 初褐色土 黒色土。1~2cm人ロームブロック混入。しまり普通。
4. 初褐色土 黒色土。ローム粒少量混入。しまりや強い。
5. 黒褐色土 ローム粒少量混入。しまりや強い。
6. 初褐色土 ローム粒黑色土混合物。粒子細かく。しまり普通。
7. 初褐色土 黒色土。ローム混合物。粒子細かく。しまり普通。
8. 褐色土 ローム、2~3cm人ロームブロック混入。ややぼそば。
9. 初褐色土 ローム、黒色土混合。粒子細かい。しまり普通。
10. 褐色土 ローム上に黒色土少量混入。幹いたいードローム混入。ややぼそば。
11. 初褐色土 9初期組。黒色土やや多い。
12. 褐色土 10初期組。ロームブロック混入。
13. 初褐色土 1cm人ロームブロック。黒色土少量混入。ややぼそば。
14. 褐色土 ロームブロック主体。ローム、黒色土混入。



02MB-B' 開土層説明

1. 初褐色土 ローム、黒色土混合。粘性。しまり普通。
2. 初褐色土 ローム粒少量含む。粘性ややあり。しまり強い。
3. 初褐色土 ローム、黒色土混合。黑色土やや多い。2~3cm人ローム粒点在。粘性やや強い。しまり普通。
4. 褐色土 ロームブロック。ローム土主体。黒色土少量混入。
5. 初褐色土 黒色土に2~3cm人ローム粒混入。粘性あり。しまり普通。
6. 褐色土 1~2cm人ロームブロック、ローム、黒色土混合層。粘性。しまり普通。
7. 初褐色土 2cm人ロームブロック。黒色土混合。粘性。しまり弱い。
8. 初褐色土 1~5cm大ロームブロック。黒色土混合。しまり弱い。
9. 褐色土 ローム土。
10. 黑褐色土 少量のローム混入。健土粒まれに混入。しまり強い。
11. 初褐色土 黒色土。ローム混合。粘性弱い。しまり普通。
12. 初褐色土 10初期組。ロームブロック混入。
13. 初褐色土 7初期組。ロームの割合やや少ない。
14. 黑褐色土 ローム、黒色土混合。ローム粒やや多い。
15. 初褐色土 ローム、黒色土混合。粘性。しまり普通。

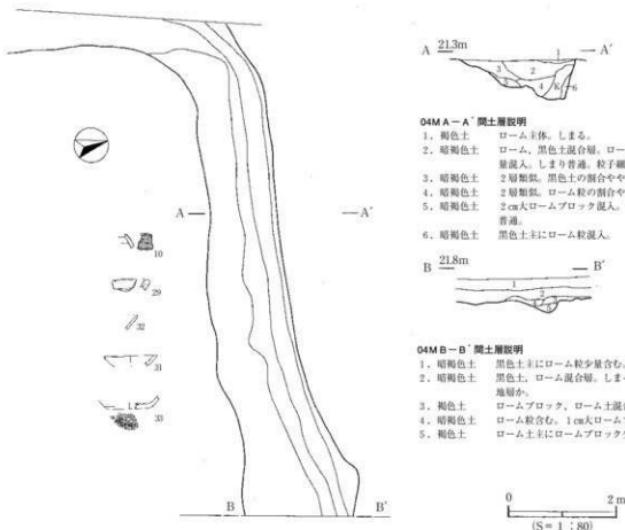
第15図 02M平面実測図

地下遺構

02M (第13・15図 図版6)

1号土塁南側に接して検出された。03Mと西際端部の土坑に切られる。南東側で04Pと重複している。規模は遺存長6.8m、幅2.8m、深さ0.6mである。断面形は緩い逆台形で、北側では底面から直立ぎみに立ち上がって段をつくり、後は非常に緩く立ち上がっている(第15図B'側)。南側では底面から30度から40度の角度で立ち上がる(第15図B側)。底面は平らでハードロームを掘り込む。西側で一旦立ち上がり段を有している。西端部は新しい土坑に切られて詳細は不明である。本遺構に付随してピットが8口検出された。配置は南壁中場に4口、底面北寄りに4口である。南壁側のピットは34~56cmの円形で、ほぼ2.1m等間に配置される。深さは、平面形の規模からすると50~60cmとやや深い。北寄りのピットは90×70cmの楕円形タイプと30cmの円形タイプの2種がある。楕円形間は2.7m、円形間は2.5m等間に配置される。深さは楕円形タイプで30cm、円形タイプで6cmである。覆土は黒色土・ローム土・暗褐色土の混合土で、自然堆積後の人为的ローム土の廃棄が土層観察から伺える。遺物は底面下層で茶白の上・下臼(54.55)が、上層一括で古瀬戸片(3)、在土地器片(50)が出土している。

本遺構は1号土塁同一方向にあり、関連施設としての可能性が考えられるが、北からの敵を想定した場合、溝の存在が攻撃上不具合である。溝内の等間隔ピットを柵列と考えると、土塁造成時とは時期を隔した段階に、溝で区画された作事が行われたと考えたい。



第16図 04M平面実測図

04M (第13・14・16図 図版1)

1号台状遺構南側で東西方向に走り、台地縁辺部で90度向きを変えて、2号土壙に沿って末端部まで進んでいる。南北方向で07P08Pと重複関係にあり、両遺構に切られる。規模は東西方向の遺存長8.6m、南北方向は36m、幅1.5m、深さ30~50cmである。断面形は逆台形状で、東西方向では南壁側、南北方向で東壁側の壁面が緩く立ち上がり、各々の反対壁面は直立ぎみに立ち上がっている。底面はソフトロームからハードローム中である。覆土は第16図B-B'間を参照してもらうと、2の整地層下から掘り込まれローム土を主体とした土層が埋め戻されている。遺物は土器かわらけを主に陶器片、漁戸・美濃鐵釉小片等が出土している。

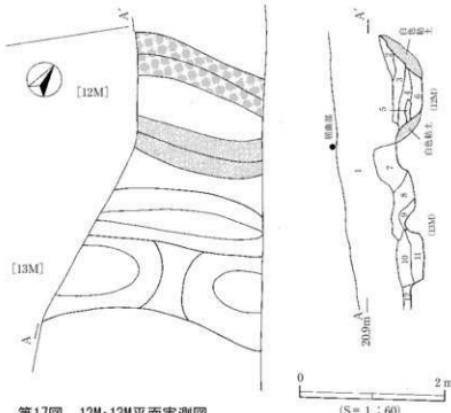
本遺構は2号土壙の項で触れたが、当初区画溝として造成されたが2号土壙築成時に土壙補強の目的で埋め戻されている。従って、04M→2号土壙・07P08Pの遺構変遷がたどれる。

12M・13M (第14・17図 図版8)

2号土壙南端部に向かって、東西方向に走る。

12Mの規模は遺存長1.8m、幅1.15m、深さは0.56mである。断面形は逆台形で南北壁共にやや角度をつけて立ち上がる。底面は平らで、ハードロームを掘り込む。この溝の特異な点は、白色粘土を壁面に貼り付けていることである。断面の厚さは、15~18cm程度で、底面には貼り付けられた痕跡は見られない。覆土は、暗褐色土を主とした自然堆積土である。遺物は、本遺構構築時の際の混入と考えられる土器片等が出土している。

13Mは北側の細溝と並走するピットにより構成される。規模は遺存長2.25m、幅1.72m、深さ0.35mである。断面形は溝側・ピット側共に逆台形で直立ぎみに立ち上がっている。底面は細溝よりピット側で



第17図 12M・13M平面実測図

深い。ハードロームを掘り込んで底面としている。覆土は、全体に締まりを欠くロームブロック混じりの暗褐色土で、埋め戻されたと想定されよう。遺物は、12Mと同様で混入と考えられる土師器甕脛部小片等が出土している。

12M・13M両遺構は、土層断面の観察から12Mが13M7層を切っており、13M→12Mの遺構変遷が伺える。また12M・13M共に2号土壙端部に溝の方向が向いており、土壙との同時存在は想定できない。12Mについては、壁面の保全を目的として粘土を貼り付けている。基本的には、作事にかかる区画溝と考えられるが、この溝について、粘土貼付という手間を惜しまない何らかの理由があったに違いないと考えられる。

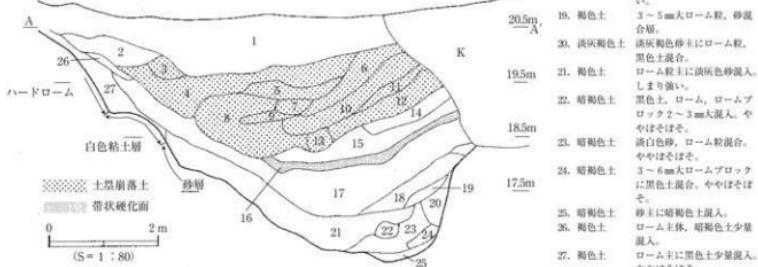
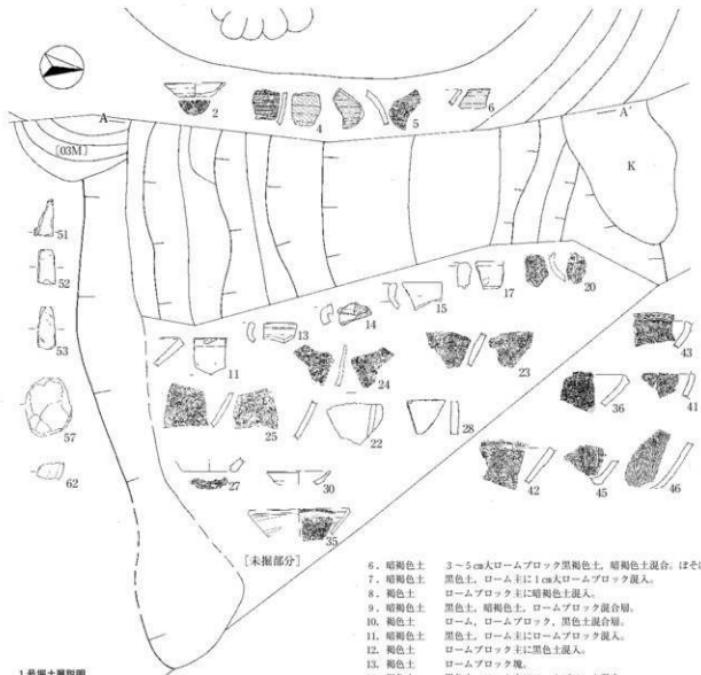
1号壙（第14・18図 図版2・3・4）

2号土壙南側に位置する。当初から不自然な地形上の窪みが観察された部分であり、崖のラインも大きく屈曲していたことから、何らかの遺構の存在が想定された。確認調査時では、トレンチ内の覆土掘削においても、遺構の性格が判断できない状況であった。

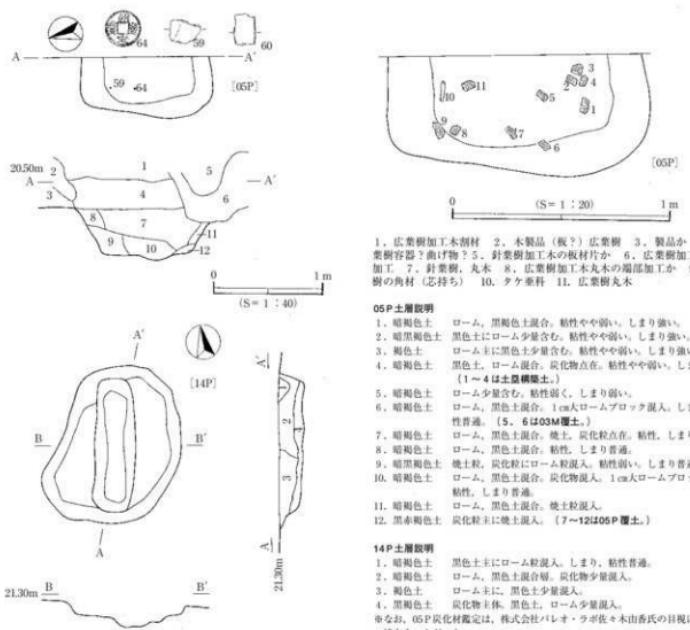
本遺構は調査区の制約上、部分的な掘り下げのみによる成果しかあげられなかった。遺構は北側のカクラン及び南側の03Mによって、壁上場が破壊を受けている。規模は上面幅10.8m、底面幅1.5m、深さ4.4mである。断面形は、底面に平坦な部分をもつが片葉研堀の範ちゅうとして捉えられる。具体的には南壁面は、階段状に概ね30~32度の角度をもって立ち上がり、北壁面は中場に角度変換点は見られるが、75度の傾斜をもって立ち上がっている。掘り込みは上場はハードローム面、中場やや上で白色粘土層、それ以下は明黄土色砂層である。覆土は概観すると（第18図下段）、2~13層が土壙構築土・16層が壙内の道路・17~27層が自然堆積層に分類できる。壙の埋まる経過は①壙の底上げにかかる自然堆積、②中程に埋まった状態での壙底道、③壙の機能停止にかかる土壙の解体が想定される。遺物は土壙構築土中及び16、17層中を主体として出土している。今回検出された遺構中では、最も遺物の出土が多い。種別は、瀬戸・美濃小皿・大皿・瓶子、常滑大漿・広口壺・片口鉢、土器かわらけ・播鉢、石製品では砥石・礎等多種にわたる。

本遺構は、規模からも想定されるように、明らかに防護上の施設である。壙の形態からは、南壁側が外部、北壁側が内部である。緩い傾斜は下りられても、きつい傾斜は上れない。土壙は北壁側に構築さ

- 12M・13M土層説明**
1. 黒褐色土
耕作土。
ローム、黒色土混じ、粘性普通。しまり普通。
 2. 黑褐色土
黒色土中にローム少量含む。粘性普通。
しまり普通。2mm大ロームブロック含む。
 3. 黑褐色土
白色粘土に黒褐色土混入。
ローム、黒褐色土混合。粘性普通。しまり強。
 4. 黑褐色土
3層類似。黑色土やや多い。
白色粘土に黒褐色土混入。
 5. 淡白色粘土
白色粘土に黒褐色土混入。
 6. 黑褐色土
ローム、黒褐色土混合。粘性普通。しまり強。
 7. 黑褐色土
3~5mm大ロームブロック混入。黑色土、ローム混入。
 8. 黑褐色土
黒色土に3mm大ロームブロック混入。
ややしまり強。
 9. 黑褐色土
8層類似。黑色土やや多い。
 10. 黑褐色土
5~7mm大ロームブロック混入。粘性やや弱。
しまり普通。
 11. 黑褐色土
10層類似。黑色土含む。
 12. 黑褐色土
黒色土にロームブロック混入。



第18図 1号堀平面実測図



第19図 05P・14P平面実測図

されたと考えられ、土塁を防御拠点として堀に入り込んだ敵や堀外の敵に対して矢や投石による攻撃を加えたと想定される。土塁は解体時に埋められたが、2号土塁との位置関係からすると、南北方向から東西方向にL字状に構築されたと考えるのが妥当である。

05P（第13・19図 図版5）

1号土塁下に位置し、03Mに切られる。調査区外に遺構が及ぶため全体は明らかではない。規模は方形状となる一辺が1.15m、深さ50cmでその他は不明である。ハードロームを掘り込んで底面としている。底面は、遺存部分では平坦である。壁面は直立ぎみに立ち上がっている。南壁立ち上がり面が被熱で赤色化する。覆土は暗褐色土を主体とする層で、全体に焼土粒・炭化粒の混入が見られる。炭化物が底面近くないし確認面から出土している。目視での判断だが、広葉樹・針葉樹・タケ等多種で加工材が多く含まれる。遺物は、銭貨1枚・加工石材2点が出土した。

本遺構は土層断面観察から、1号土塁と重複し、より古い時期に造られている。遺構の一部しか検出されていないので判断はむずかしいが、炭化材、銭貨の出土・被熱を受けた壁面から火葬墓ないし火葬施設と想定されよう。後段の08Pに類似する可能性も考えられる。興味ある事実としては、火葬材として自然の木材のみでなく、加工材も使用しており宗教上の倫理観がおおまかであったかと考えられる。



14P (第13・19図 図版6)

04M南側に近接して検出された。平面形は不整橿円形で、底面中央部分で溝状に掘られている。規模は上面で $1.47m \times 1.1m$ 、下段の溝状部分は $1.25m \times 0.38m$ で深さは確認面から各々 $12cm$ 、 $18cm$ である。長軸方位は下段の溝部分で、N- 9° -Eをさす。壁・底面共にハードロームを掘り込んでおり、木根によるカクランも目立つため明瞭ではない。底面は二段で、上段の浅いテラス状部分の間に、下段の溝状部分が挟まれている。覆土は上層で褐色土・暗褐色土主体の層で、下層では溝状部分に炭化物が充填された状態で検出された。遺物は、在地土器の胸部片が出土しているか小片のため図示していない。

本遺構は炭化物の出土状況や溝状部分の機能性から、火葬施設として考えるのが妥当と言えよう。土層断面から3層はローム土で天井部の崩落、溝状部分は通風溝、遺構全体で見ると北側が送風口・南側が焼成室と想定した。

07P (第14・20図 図版7)

2号土壘南側部分に近接して検出した。04Mと重複し、切っている。平面形は隅がやや丸い長方形で、規模は $2.65m \times 1.9m$ 、深さ $0.35m$ である。長軸方位はほぼ南北方向をさす。壁面は、全体に緩く立ち上がっている。底面は、壁面との境が不明瞭で緩やかな丸底状である。本遺構の特徴は、当初の掘り込みに灰色粘土を貼り付けて土坑としている点である。粘土は $12 \sim 20cm$ の厚さをもつ。覆土は、褐色土を主体にロームブロック混じりの土層で、人為的堆積土と考えられる。遺物は覆土中から銭貨1枚、土器擂鉢片1点が出土した。

本遺構は粘土貼り土坑として、中世に通有な遺構である。液体を貯めておくことが目的と考えられるため、貯水施設・晒し場等生活上の施設としての性格が想定される。

08P (第14・20図 図版7)

07P北側に位置し、07P同様04Mと重複し、切っている。平面形は不整長方形で、規模は $2.9m \times 1.5m$ 、深さ $0.6m$ である。長軸方位は N- 76° -Eをさす。壁面は、ほぼ直立に立ち上がる。底面は平坦である。東壁立ち上がり面が被熱で赤色化している。更に図示した部分で底面に密着ないしやや浮いて燒土が検出された。覆土はローム土、ロームブロック、燒土ブロックを混入した層で、遺構廃棄後の人为的堆積土と考えられる。遺物は出土しなかった。

本遺構の性格は、遺物の出土がなく判断がむずかしいが、遺構の規模・人为的堆積土から土坑墓としての性格を想定したい。

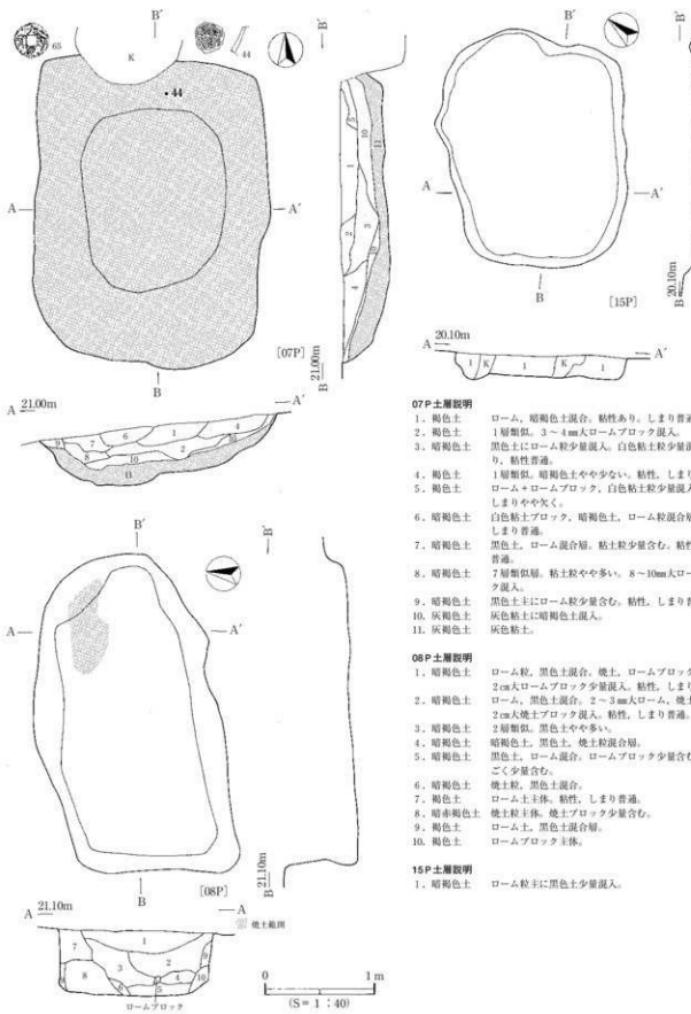
15P (第14・20図 図版8)

1号堀南側に位置する。平面形は不整長方形で、規模は $2.15m \times 1.65m$ 、深さ $0.18m$ である。長軸方位は N- 45° -Eをさす。壁面は直立ぎみに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。覆土は暗褐色土の單一土層である。遺物は小片のため図示できなかったが、土器かわらけの底部片が出土した。

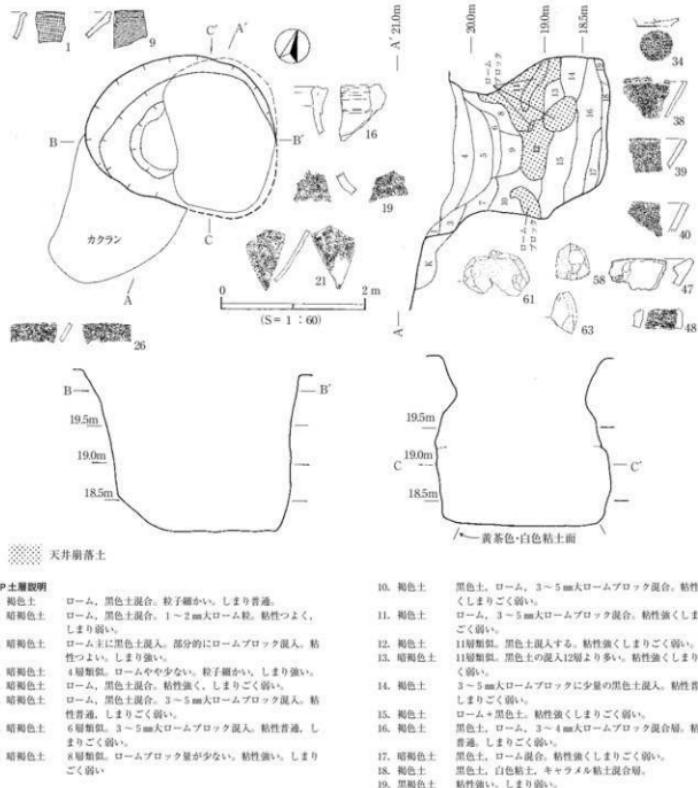
本遺構の性格は、判断する材料が乏しく用途不明である。

04P (第13・21図 図版5)

調査区北側で、02M南壁に接して検出された。新旧関係は不明である。上面の平面形は隅丸のずんぐりした三角形で、長軸 $2.65m \times$ 底辺 $2.0m$ 、深さ $2.25m$ である。豊坑下に地下室が形成される。豊坑は三角形長軸先端部側から斜め方向に掘られ、底面プランは半円形で $1m \times 0.55m$ 、底面は斜めで地下室底面にすりつく。地下室の規模は、 $1.8m \times 1.4m$ の隅丸長方形である。豊坑から地下室奥壁の方位は、N- 71° -Eをさす。確認面はハードローム層で、白色粘土層上面まで掘り込んで底面とし、平坦である。地下室の天井部分は、その痕跡からドーム状をなすものと想定され、高さは底面から $1.1m$ である。覆土は自然堆積土で、 $14 \sim 19$ 層上に、ロームブロック・ $11 \sim 13$ 層の天井部崩落土がのり、1.



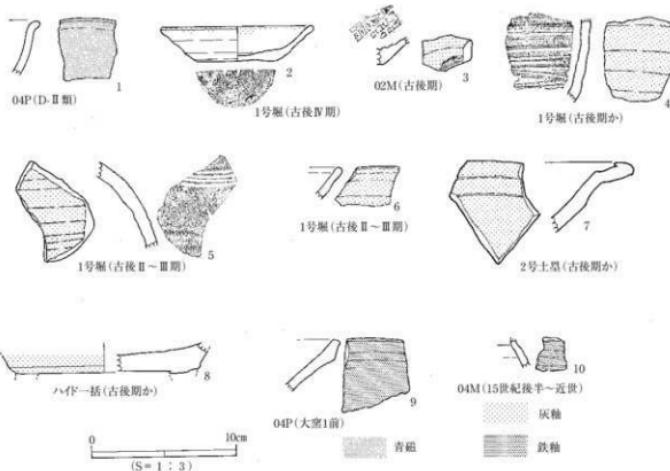
第20図 07P・08P・15P平面実測図



第21図 04P平面実測図

3～10層がまた堆積している状況であった。遺物はほぼ天井部崩落後の混入である。今回検出された遺構中では1号堀の次に多い。種別は貿易陶磁の青磁碗、瀬戸・美濃鉄釉鉢、常滑大甕、土器かわらけ、擂鉢・瓦質内耳土器・火鉢、加工痕跡の石等多種に及ぶ。自然遺物では、アカニシが底面近くから少量出土した。

本遺構は、02Mと重複しており、02Mは1号土壙とは時期を隔たる作事にかかる施設と前述した。このことから3遺構は、妙見前遺跡のこのエリアの時期変遷を少なくとも3期に分けることが可能であると想定できよう。02Mや04Pから出土した遺物をみても、土壙を構築し、有事に備えた時期と重なり合う要素は認められない。詳細は後述することとしたい。



第22図 中世遺物(1)貿易陶磁瀬戸・美濃小皿・瓶子

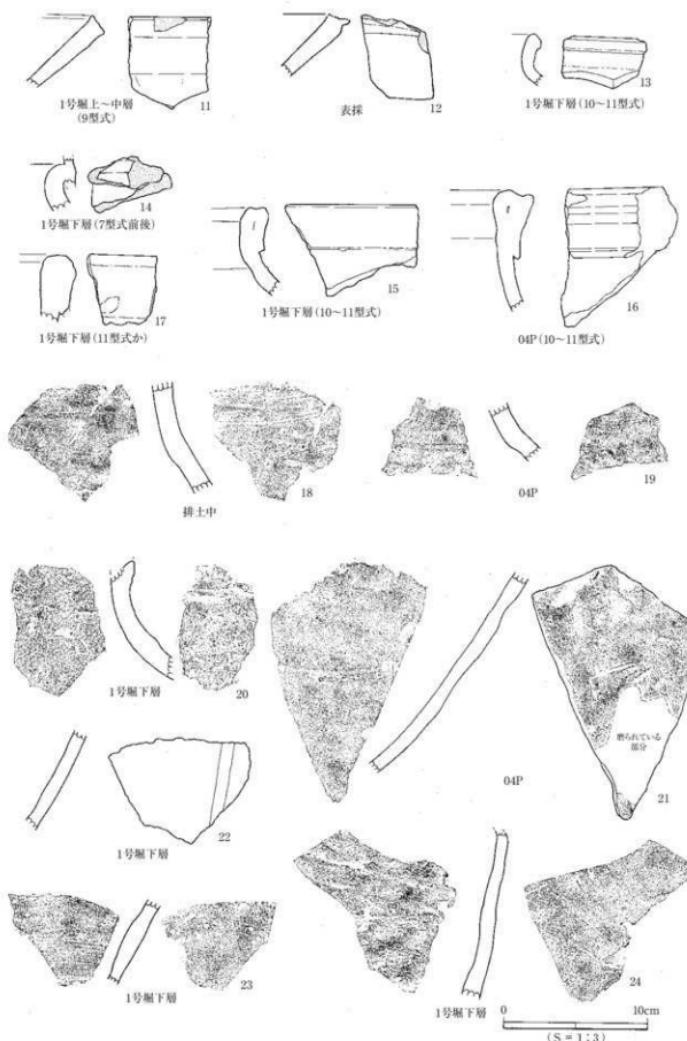
出土遺物

貿易陶磁器（第22図 図版10）

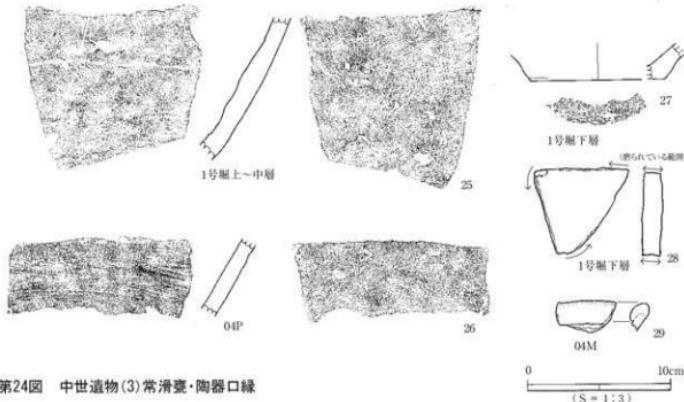
本遺跡の調査においては1点のみの出土である。1は龍泉窯系青磁碗で、胎土は緻密・灰色で、色調は灰緑色を呈する。D-II類に分類され、15世紀前半代の所産。

瀬戸・美濃窯陶器（第22図 図版10）

今回の調査では、9点が出土した。2は縁釉小皿で、口径10.6cm・底径5.2cm・器高2.4cmで口縁部内外面にガラス質の灰釉がみられる。胎土は緻密・灰白色で、底部切離しは回転糸切り未調整である。古瀬戸後期IV期で15世紀中葉～後半の所産。3は鉢皿で、底部から体部下端が遺存する。底部切離しは回転糸切り、内面はヘラによる格子状の刻み目が見られる。体部外面にガラス質の灰釉が点状に付ける。古瀬戸後期で14世紀末から15世紀代の所産。4は灰釉瓶子で、胴部中位小片が遺存する。外面に淡緑色のガラス質の施釉、内面は木口状工具によるナデ整形が見られる。胎土は緻密・淡茶灰色、古瀬戸後期の15世紀代か。5は灰釉瓶子で、胴部上位の肩部分が遺存する。内外面に淡緑灰色のガラス質の施釉が見られる。胎土は緻密・淡茶灰色で、古瀬戸後期II～III期で14世紀末から15世紀前半の所産。6は直縁大皿で、内外面に淡緑灰色のガラス質の施釉が見られる。胎土は緻密・淡茶灰色で、古瀬戸後期II～III期で14世紀末から15世紀前半の所産。7は自己判断によるため断定できないが、折縁深皿口縁部か。内外面灰白色の施釉で、断面は淡茶灰色を呈する。時期は古瀬戸後期か。8も同様のケースで断定できないが、直縁大皿の底部か。底径11.4cmで、底部立ち上がり部に突起状の脚破損部分が1ヵ所見られる。9は鉄釉擂鉢で、口縁部小片が遺存する。内外面とも暗赤灰色を呈する。胎土は緻密で長石・石英を含み、断面は灰白色を呈する。大窯I段階前半で15世紀末の所産。10は鉄釉小壺で、頸部から胴部上半小片が遺存する。内外面とも暗茶色を呈する。胎土は緻密で石英・小石片を含み、断面は淡茶灰色である。15世紀後半から近世の所産。



第23図 中世遺物(2)常滑片口鉢・壺



第24図 中世遺物(3)常滑壺・陶器口縁

0
10cm
(S = 1:3)

常滑窯陶器 (第23・24図 図版10・11)

今回の調査で主体量を占めている。破片数は64点で、内18点を図示した。内訳は片口鉢2点、広口壺口縁部1点、大甕口縁部4点、胴部10点、詳細不明の壺口縁部1点である。

11は片口鉢で、外外面淡茶赤色、胎土は長石粒を含み、ナデ整形される。9型式で15世紀前半の所産。12も片口鉢で、外外面は暗茶褐色、内面は淡茶赤色、胎土は長石粒を含み、ナデ整形される。断定はできないが10型式であろうか。13は広口壺で、外外面は茶赤色、口縁部内外にガラス質の自然釉が付着する。15世紀後半から16世紀代か。14は大甕口縁部で、外外面淡茶赤色、胎土は長石粒を含み、焼成は堅牢である。7型式前後で14世紀前半の所産。15は大甕口縁部で、外外面暗灰褐色。胎土は長石粒・石英を含む。両面の剥離が顕著である。15世紀末から16世紀初頭にあたる。16は大甕口縁部で、外外面淡茶赤色、胎土は長石粒を含み、焼成は良好である。10～11型式で15世紀末から16世紀初頭にあたる。17は大甕口縁部で、外外面灰色、胎土は長石粒を含む。両面の剥離が顕著で、器面が確認できない。11型式か。18は大甕頭部から胴部片で、外外面は淡茶褐色、内面は淡茶赤色で、胎土は長石粒・砂粒を含む。外外面木口状工具によるナデ整形がみられる。19は大甕頭部から胴部片で、外外面は自然釉、内面は淡茶赤色で、胎土は長石粒を含む。焼成は良好である。20は大甕頭部から胴部片で、外外面は淡茶灰色、内面は暗茶色で、胎土は長石粒を多く含む。焼成は良好である。21は大甕胴部片で、外外面淡茶灰色、胎土は長石粒を含む。胴部外面上部に磨られた痕跡が見られる。22は大甕胴部片で、外外面暗青灰色で、胎土は長石粒を多く含む。外外面に自然釉の帶状に重ねた痕跡が見られる。23は大甕胴部下半片で、外外面は茶赤色、内面は暗青灰色を呈する。胎土は長石を混入し緻密で、焼成は堅牢である。内外面に木口状工具による擦痕が見られる。24は大甕胴部下半片で、外外面は茶赤色、内面は淡茶灰色を呈する。胎土は長石片を混入し、焼成は堅牢である。25は大甕胴部下半片で、外外面とも橙褐色で、胎土に長石片を多く混入する。焼成は良好である。内面に指頭圧痕・横位ナデが見られる。26は大甕胴部下半片で、外外面とも淡青灰色で、胎土に長石粒を多く含む。外外面に木口状工具による擦痕が見られる。27は鉢類の底部と想定できるが、推定底径9.4cm、遺存高2.5cmで外外面は橙色、内面は淡茶褐色を呈する。胎土は長石粒・石片を含んでいる。28は大甕胴部片の再利用品で、外外面とも暗青灰褐色で、胎土は長石粒を混入する。三角形の断面周縁が磨かれている。重量は58.0gである。29は詳細



は不明であるが、陶器壺口縁部である。内面に口縁の折り返しをもつ。胎土は灰白色・緻密で、内外面ともに赤茶色の施釉が見られる。

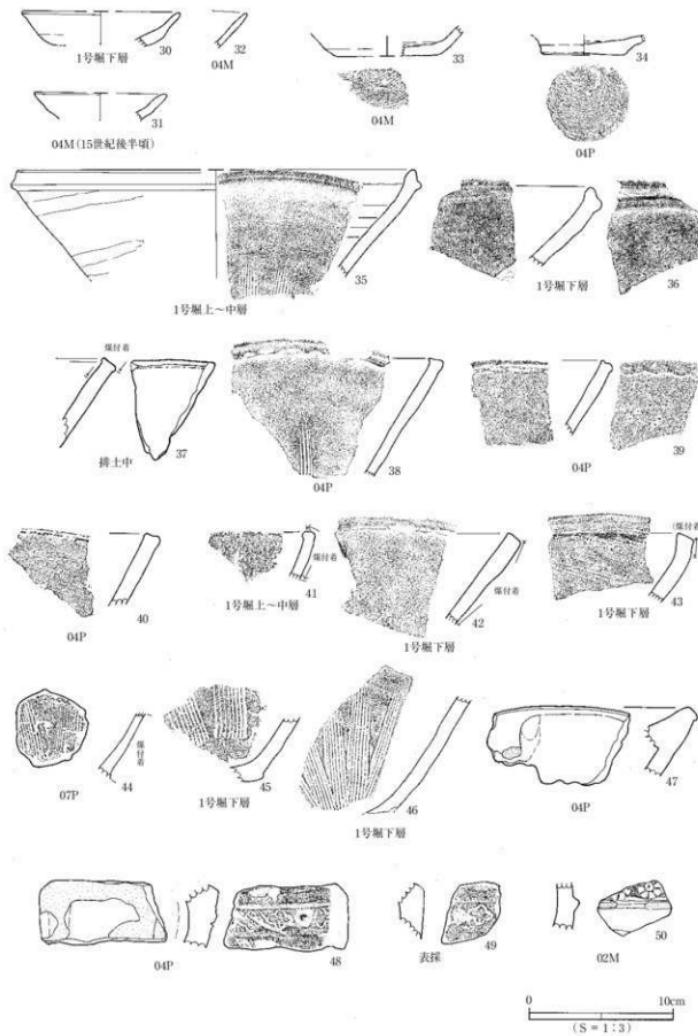
土器（第25図 図版11・12）

今回の調査では常滑窯製品に次いで主体量を占めている。破片数は26点で、内21点を図示した。内訳はかわらけ5点、常滑窯片口鉢模倣1点、擂鉢9点、内耳土鍋2点、瓦質内耳土器1点、瓦質火鉢3点である。

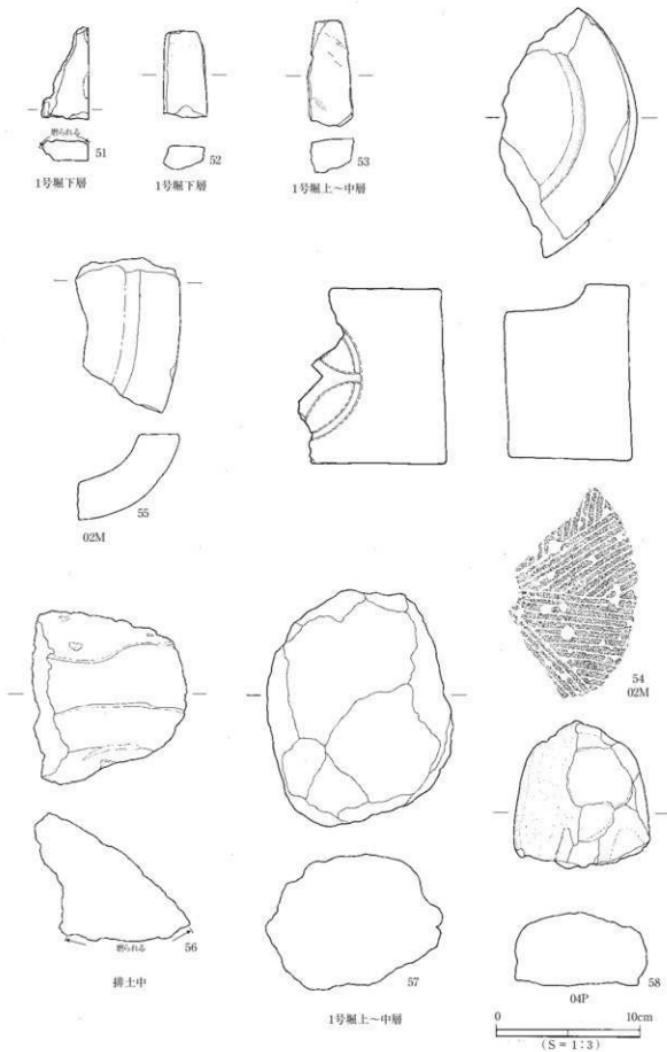
30はかわらけで、口径10.8cm・器高2.3cm、胎土は雲母・砂粒を含み、内外面ナデ。色調は内外面淡橙褐色。31はかわらけで、口径9.0cm・遺存高1.8cm、胎土は雲母粒を含み、内外面ナデ。内面に煤が付着する。15世紀後半くらいの所産。色調は内外面淡橙褐色。32はかわらけで、胎土は雲母粒・砂粒を含み、内外面ナデ整形。内面剥離著しい。色調は内外面淡橙褐色。33はかわらけ底部で、底径6.8cm・遺存高2.1cm、胎土は雲母粒・砂粒を含み、底部切離しは左回転糸切り未調整か。内外面淡茶褐色。内面に煤付着。34はかわらけ底部で、底径6.0cm・遺存高1.4cm、胎土は雲母粒・赤色粒・砂粒を含み、底部切離しは右回転糸切り未調整。内外面淡茶黃褐色。内面同一方向のナデ。35は擂鉢で口径27.2cm、遺存高7.5cm、胎土は少量の雲母粒を混入、6本単位の櫛目が施される。口縁部形態は瀬戸・美濃窯擂鉢に近い。外面胴部はヘラナデ整形、内外面淡橙褐色。15世紀後半から16世紀初頭の所産。36は擂鉢で、胎土は少量の雲母粒を混入する。口縁部形態は瀬戸・美濃窯擂鉢に近い。外面胴部はヘラナデ整形、外面茶褐色・内面は淡橙褐色を呈する。15世紀代の所産。37は常滑窯片口鉢模倣の土器で、胎土は緻密で内外面淡灰褐色を呈する。焼成は硬質である。口縁部上端から内面に煤付着。38も擂鉢で、胎土は緻密で少量の雲母粒を混入する。外面淡黒灰褐色・内面淡灰褐色で、焼成は硬質である。5本単位の櫛目を施す。39は擂鉢で、胎土は少量の雲母粒を混入、内外面淡灰褐色を呈する。焼成は硬質である。40は擂鉢で、胎土は少量の雲母粒を混入、内外面淡灰褐色を呈する。焼成は硬質である。41は擂鉢で、胎土は白色粒・雲母粒を含む。外面に煤が付着する。外面淡黒灰色・内面淡茶灰色である。15世紀の所産である。42は擂鉢で、胎土は雲母粒を混入する。外面は煤の付着で黒褐色、内面は灰褐色を呈する。焼成は硬質である。43は擂鉢で、胎土は雲母粒を多く含む。外面は口辺部に煤が付着、内面は淡茶褐色を呈する。木口状工具によるナデ整形が見られる。44は擂鉢の底部に近い部分で、胎土は白色粒・雲母粒を混入する。外面は煤の付着で黒褐色、内面は淡茶褐色を呈する。9本以上の単位の櫛目が施される。円形状に二次加工される。45は擂鉢底部から胴部下半で、胎土は雲母細粒を含み緻密である。内外面淡茶灰色で、8本単位の櫛目が施される。15世紀代の所産。瓦質か。46は、擂鉢胴部下半で、胎土は長石・雲母・赤色粒を含む。焼成は良好で硬質である。8本単位の櫛目が施される。外面は淡茶褐色・内面は淡橙褐色を呈する。15世紀代の所産。47は瓦質内耳土器で、胎土は長石粒・雲母粒・砂粒を含む。焼成は良好で、色調は外面淡茶灰色・内面淡青灰色である。内外面ナデ整形。48は瓦質火鉢口縁部で、胎土は長石粒・黑色粒・砂粒を含み、緻密である。焼成は良好で、色調は内外面とも灰白色で、部分的に青灰色を呈する。文様は、上下の沈線中にヘラ描花文2+珠文1のセットか。口縁内面直下に仕切り状の突起が貼り付けられる。また、下辺断面は二次的に砥石として使用される。時期は15世紀後半か。49は48と同一個体である。50も瓦質火鉢で、胎土は緻密で、長石粒・石英粒を含む。焼成は良好で、色調は外面淡橙褐色・内面淡茶灰色である。断面三角形の凸帯上位に八葉花文のスタンプを押印している。時期は15世紀後半か。

石製品・金属製品（第26・27・28図 図版12・13）

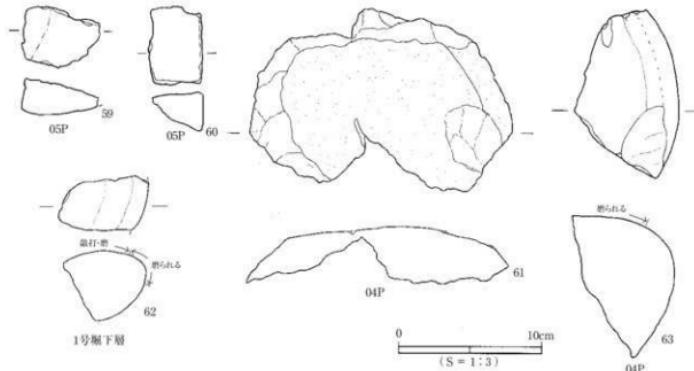
明確な石製品としては、硯・砥石・茶臼がある。その他は加工痕・使用痕の石、繩文時代石器の転用品である。金属製品では、銭貨が2枚である。



第25図 中世遺物(4)土器かわらけ・鑄鉢・内耳・火鉢



第26図 中世遺物(5)石製品 磨石・茶臼・加工痕跡の石



第27図 中世遺物(6)石製品 加工痕跡の石・石器等

51は硯転用の砥石で、石材は不明である。上面が磨かれている。側面と底面の断面角度はほぼ直角である。長さ6.4cm、幅3.1cm、厚さ1.4cm、重量は32gである。52は凝灰岩質の砥石で、上面及び右側面が磨かれている。長さ6.0cm、幅2.9cm、厚さ1.5cm、重量は40gである。53も凝灰岩質の砥石で、上面が磨かれている。長さ7.3cm、幅3.0cm、厚さ2.1cm、重量は70gである。54は茶白上白で、石材は砂岩か。上面より下面でやや広がる断面形態をもつ。側面の把手部分には、4単位の円弧による十字状の文様が施される。その中央部に四角の平面形と想定される挿入部があり、深さは4.1cmである。上面の推定径19.0cm、厚さ12.0cm、重量は2040gである。55は茶白下白の受け部で、石材は安山岩か。参考径44cm、遺存高5.7cm、重量290gである。56はおそらく縄文石器の石皿片で、中世に二次的使用された痕跡をもつものである。当初の石器を六分割ないし八分割したものを製品とし、下面全体に擦られた範囲が見られる。縦12.1cm、横11.0cm、高さ8.5cm、重量870gである。擦られた痕跡から屋根にのせた重し石か。57は楕円形に加工された石で、石材不明。被熱による煤の付着が見られる。縦16.2cm、横12.1cm、厚さ9.3cm、重量2080gである。攻撃用具としての投石ないし屋根の重し石か。58は56と同様に石器の再利用品で、上面右側と下面に加工痕跡をもつ。石材不明。部分的に被熱を受ける。縦10.2cm、横9.0cm、厚さ5.0cm、重量635gである。下面に擦り跡が見られ、屋根にのせた重し石か。59は多孔質の石材で上面が比較的滑らかである。縦3.8cm、横5.6cm、厚さ2.8cm、重量85gである。性格は不明。60も多孔質の石材で上面・側面が面取りされている。縦5.5cm、横3.8cm、厚さ2.1cm、重量60gである。形態から石塔の一部か。61は2破片の接合遺物で、他に接合しない2点がある。上面・側面が面取りされる。安山岩質の石材で、縦12.5cm、横18.1cm、厚さ4.0cm、重量850gである。形態から石塔の一部か。62は混入遺物で縄文石器の磨石である。石材不明で、上面から側面上部が磨られ、上面に敲打痕をもつ。被熱を受けている。重量は100gである。63も56と同様に石皿の再利用品で、分割されこの形状になっている。石材は不明である。縦11.5cm、横7.2cm、厚さ9.5cm、重量730gである。部分的に被熱を受ける。やはり屋根の重し石か。64は北宋銭で大觀通寶。初鋤年は1107年で、真書体。縁外径2.3cm、郭外長0.7cm、縁厚0.11cmで重量1.4gである。65は南宋銭で紹定通寶。初鋤年は1228年で、篆書体か。縁外径2.35cm、郭外長0.77cm、縁厚0.12cmで重量2.5gである。



第28図 中世遺物(7)金属製品 銭貨

第3章 ま と め

縄文時代

第8.9図に示したように、早期撫糸文期から前期、中期、後期に至る各時期に足跡が見られる。特に中期後半の加曾利E式期は、同期の集落が展開していた可能性が高い。遺構についてみるとピット5基が検出されている。遺物では、出土量が他の時期に比べて多い、個々の土器の破片が大きい、石器類・土製品や中世転用の石皿等生活に密着した遺物が出土している等の根拠が挙げられる。

中世

遺構について

b 地点における成果

検出された遺構は、土壘(1号・2号)2条、檜台(1号台状遺構)1基、地下式坑(04P)1基、火葬施設(05P・14P)2基、粘土貼り土坑(07P)1基、土坑(08P・15P)2基、1号台状遺構周辺の溝状遺構(06M～10M)5条、作事上の区画溝状遺構(02M・04M・12M・13M)4条、防護用空堀(1号堀)1条である。第6図を参考に、個々の遺構関係について述べていくこととする。

調査区北側では1号土壘下に検出された05P、土壘平行で南側に位置する02M、02Mと重複した04Pが遺存する。新旧関係は05P→1号土壘、02M↔04Pの最大4段階が想定される。02Mと1号土壘の位置関係からは、土壘の構築目的を北側の敵に対しての攻撃用とした場合には、02Mは有効ではない。ただ、1号土壘の裾部に平行して本遺構が走っており、前後関係は定かではないが、1号土壘構築時に前後して深く係わっていたと考えられる。02M溝底面の小ピットは、防護上施設の痕跡ともいえるか。各段階を想定すると、1. ピット等構築段階 2. 区画溝構築段階 3. 土壘構築段階の3段階が設定されよう。

調査区中央から南側では04M・2号土壘・07P・08Pの新旧関係が注目される。具体的には、04M→2号土壘、04M→07P・08Pの旧→新の関係がたどれる。ここでは、1. 区画溝構築段階 2. ピットないし土壘構築段階が見出される。

調査区南側では、1号堀・12M.13M・2号土壘の遺構関連が注目される。1号堀の遺構概要でもふれたが、1号堀北側上場には、土壘が構築されていたと想定される。土壘は少なくとも5m以上の幅を有していたとすると、12M.13Mに及んだといえる。1号堀と12M.13Mは新旧関係にあったと想定できる。更に1号堀と2号土壘は、想定される土壘をつなぐ形で一連の防護施設とすることが妥当といえよう。ここでは、南側からの敵を想定した防護施設構築がおこなわれていた。12M.13Mはかかる施設構築前後に使用された区画溝ないし排水溝としての機能が想定される。



吉橋城・尾崎館・渋内遺跡の相關的位置づけ

今回の調査は、吉橋城の城域を再認識する意味で有意義であった。第2図を参照すると吉橋城は、北に桑納川、東に花輪川、西は石神川に挟まれた舌状台地上に位置する。河川は自然の堀といふ意味があり、南側の台地基部の防護が重要となる。村田一男氏は、南側の八幡神社を大木戸としてその北側台地全体を広義の城域に想定されている（注1）。神社から東方向の道路部分を堀底道に想定されており、台地基部の防護がこれに相当する。筆者もこの想定に従いたい。

本来八千代の地勢は、台地北側斜面が緩やかに傾斜する特性がある。北側の台地等高線に転じてみると（第2図）、1号土塁北側は緩斜面が形成されるが、東側に向って切り立った等高線が続きI郭東側まで地形の変化が見られる。これは本来の地形であった緩斜面を、土木工事による切土で急斜面に造り替えていると想定される。同様の人造地形は（第4図）、1号土塁西側端部から2号土塁下の急斜面にもみられる。特に1号堀南の屈曲は、眼下の平場を意識しているかのようである。

こうして概観してみると、I郭・II郭を中心に据えた防衛上の配置が見えてくる。I郭東側は東側部分の外郭、妙見前遺跡ab地点は西側部分の外郭である。更にa地点で検出された南北方向の堀とb地点北側の1号土塁、西側の2号土塁、南側の1号堀を開んだ区画は外郭の特化した部分といえる。また、1号土塁は西側の一部しか遺存しないが、本来はI郭に向けて東西方向に構築されたと考えるのが防衛上妥当といえよう。他に曲輪と想定できる平場は、1号土塁北側の緩斜面で腰曲輪、2号土塁西側眼下の宅地部分で水の手曲輪（井戸）に比定可能か。

吉橋城を截せた台地の輪郭部・平坦部の一部は、防衛上の土塁・堀・切土等普請が行われた。台地中程に位置する渋内遺跡では、台地整形区画内に地下式坑が13基検出された。同一台地上及び周辺谷部の土地利用については、屋敷家屋・田畠・貯蔵施設・馬場等の生活機能・城館管理機能が考慮される。想定の域を超えないが、渋内遺跡は貯蔵用の生活機能、尾崎館は城主の平時時の生活空間としての性格が妥当と考える。

（注1）八千代市史編さん委員会編 1979「八千代市の歴史」八千代市 第3章中世第4節吉橋城址 P215～225

遺物からみた本遺跡の様相

前述したように本遺跡は、吉橋城外郭として防衛上の性格を担ってきたことが明白であった。出土土器・陶器・磁器・石製品等に転じてみるとその種類は多種多様で、この空間周辺の土地利用を考える上で示唆に富むものであった。土器類を分類してみると以下のとおりである。

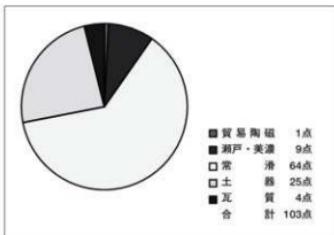
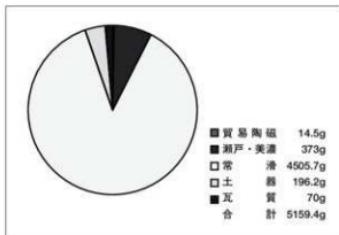
- ①饗応具—青磁碗、瀬戸・美濃（小皿・小壺・大皿・深皿・瓶子）、土器（カワラケ）
- ②調理具—瀬戸・美濃（卸鉢・擂鉢）、常滑（片口鉢）、土器・瓦質（内耳土鍋・擂鉢・内耳土器）
- ③貯蔵具—常滑（広口壺・大甕）
- ④その他—瓦質（火鉢）

本地点は遺構間の重複から、①区画溝構築段階、②ピット等構築段階、③土塁・堀構築段階の各段階に分けられることは前述した。①と②が入れ替わることもあるが、最終的に③に移行している。①～④は基本的には平穏な時期、しかも饗応などの施設があったと想定される②の段階に帰属するものと考えたい。また調理具の内、内耳土鍋等の一部は有事に際しての野営に携行したものか。

石製品は茶臼・硯・加工痕の石等が出土した。茶臼は火薬加工とも想定されるが、ここでは瀬戸・美濃鉄釉小壺の出土から茶道具として考えたい。平穏な時期の饗応時に使用されたとすれば②の段階に帰属すると想定される。硯は執務用具とすれば同様に②の段階といえよう。加工痕の石については、確証のある根拠はないが、墓石としての宝篋印塔ないし五輪塔の可能性を想定している。



貢易陶磁		窓戸・美濃		常 清				土器		瓦質		合 計					
遺構名	個数	遺構名	個数	鉄輪	鉄輪	鉄輪小窓	直線大窓	折線深皿	反転丸子	片口盤	広口盤	大腹	内瓦土鍋	カワラケ	埴林	内瓦土鍋	火鉢
O2M	1											4			6	1	12
O4M												2		4			2
O4P	1											1	1	4	1	1	16
OSP												1					1
OSP																0	
O7P															1		1
1号窓														1			1
1号窓	1																1
2号土器												1		2			4
窓跡												12			1		16
合 計	1	1	1	1	3	2	1	2	2	1	61	2	11	12	1	3	103



産地別組成（重量）

産地別組成（破片数）

出土陶磁器・土器の資料は、財団法人千葉県教育振興財団井上哲朗氏に実見いただいた。記して感謝の意を表したい。また、筆者の力量不足からくる事実誤認があると思われるが、全て筆者の責によるものであることをお断りしておく。

参考文献

第1章縄文時代中期

- 上谷遺跡 八千代市遺跡調査会 2003～2004 『千葉県八千代市上谷遺跡 第12～4分冊一』
 新林遺跡 八千代市遺跡調査会 2007 『千葉県八千代市新林遺跡 c地点発掘調査報告書』
 ヲサル山遺跡 財団法人千葉県文化財センター 1986 『八千代市ヲサル山遺跡』
 ヲサル山南遺跡 八千代市史編さん委員会 1991 『八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世』
 向山遺跡 財団法人千葉県文化財センター 1994 『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡他』
 西内野遺跡 八千代市遺跡調査会 2007 『千葉県八千代市西内野遺跡発掘調査報告書』
 ライノ作南遺跡 八千代市遺跡調査会 2000 『千葉県八千代市ライノ作南遺跡発掘調査報告書』
 桑橋新田遺跡 八千代市教育委員会 1993 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成4年度』
 八千代市教育委員会 1994 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成5年度』
 浅間内遺跡 八千代市教育委員会 2007 『千葉県八千代市浅間内遺跡発掘調査報告書』
 八千代市遺跡調査会 2007 『千葉県八千代市浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡』
 八王子台遺跡 千葉県教育委員会 2002 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報 平成13年度』
 海老ヶ作貝塚 千葉県 2000 『千葉県の歴史 資料編 考古1(旧石器・縄文時代)』P544～547
 船橋市教育委員会 2003 『平成8年度～平成11年度 船橋市発掘調査報告書』
 長兵衛野南遺跡 八千代市遺跡調査会 2000 『千葉県八千代市長兵衛野南遺跡発掘調査報告書』
 真木野向山遺跡 八千代市遺跡調査会 2008 『千葉県八千代市真木野向山遺跡』
 桑納前畠遺跡 睦小学校北方遺跡調査会 1978 『千葉県八千代市桑納前畠遺跡』

第1章中世

- 作山遺跡 八千代市教育委員会 2003 『千葉県八千代市作山遺跡発掘調査報告書』
- 渋内遺跡 八千代市教育委員会 1983 『千葉県八千代市北部遺跡群緊急発掘調査報告』
- 吉橋城跡 八千代市教育委員会 1987 『千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告集』
- 八千代市史編さん委員会 1979 『八千代市の歴史』P215～225
- 八千代市史編さん委員会 1991 『八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世』
- 正覚院館跡 八千代市史編さん委員会 1979 『八千代市の歴史』P152～155
- 八千代市史編さん委員会 1991 『八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世』
- 八千代市教育委員会 1995 『平成6年度八千代市埋蔵文化財発掘調査年報』
- 八千代市遺跡調査会 1999 『千葉県八千代市正覚院館跡』
- 浅間内遺跡 八千代市遺跡調査会 2007 『千葉県八千代市浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡』
- 米本城跡 八千代市史編さん委員会 1979 『八千代市の歴史』P195～215
- 八千代市史編さん委員会 1991 『八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世』
- 金剛城跡・桶ヶ山館跡・小野田城跡・八木ケ谷城跡
船橋市史編さん委員会 1987 『船橋市の遺跡 [船橋市史資料(二)]』
- 船橋市教育委員会 2000 『平成11年度 船橋市内遺跡発掘調査報告書』
- ### 中世全般
- 八千代市教育委員会・八千代市中世館城址調査団 1976 『八千代市中世館城址調査報告』
- 龍ヶ崎市教育委員会 1987 『龍ヶ崎市史 別編II 龍ヶ崎の中世城郭跡』
- 小学館版 1989 『探訪ブックス「日本の城10」城郭事典』
- 千葉県教育委員会 1995 『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書I－旧下総国地域－』
- 財団法人千葉県文化財センター 2000 『研究紀要20 中近世城館跡の構造と特質』
報告書
- 財団法人山武郡市文化財センター 1994 『田向城跡』
- 財団法人印旛郡市文化財センター 1998 『成田ビューカントリー俱楽部造成地内埋蔵文化財調査報告書(3)』
- 財団法人東総文化財センター 2000 『千葉県匝瑳郡光町篠木城跡・城山遺跡 資料編』
- 財団法人千葉県文化財センター 2001 『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書9』
- 財団法人千葉市文化財調査協会 2002 『千葉市生実城跡一昭和63年度・平成3～6年度調査一』
- 松戸市遺跡調査会 2004 『千葉県松戸市木根内城跡 第2地点発掘調査報告書』
- 財団法人印旛郡市文化財センター 2005 『千葉県佐倉市井野安坂山遺跡 井野長剣遺跡(第9次)
井野城跡 井野宮ノ台遺跡 井野外山遺跡』
- ### 陶磁器・土器類
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1985 「出土陶磁よりみた15、16世紀における両期の素描」『MUSEUM No.415号』
- 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 財団法人泉屋博古館編 2004 『貨幣』株式会社便利堂
- 藤澤良祐 2005 『日本の遺跡5 瀬戸窯跡群』同成社
- 同实行委員会編 2005 全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」発表要旨集
遺構
- 篠瀬裕一 2006 「地下式坑の分類と編年試論」『房総中世考古第2号』房総中世考古研究会



図版 1



1. 遺跡遠景（北東から）

1. I 郭と調査地区の直線距離は、約350mである。この間の崖面は、人工的に切土し、傾斜をよりつけている。
2. ①は1号土塁東側端部で、切り崩しによる削平はあると見られる。更に東側に長く続く可能性が高い。
②1号台状遺構
3. 現況での高さは80~100cm程度である。



2. 1号土塁・1号台状遺構現況（西から）



3. 1号台状遺構現況（南から）



4. 2号土塁・1号塹現況（北から）

①は2号土塁端部で、②は1号塹の掘削前の状況。



5. 2号土塁現況（北から）

①は2号土塁北側端部。②は南側端部。



図版2



1号烟突掘状況（南から） 堀底からの深さは4mを超える。



1号烟土層断面（南から）



図版 3



1号堀完掘状況（北から） 南側壁面は階段状に緩やかに立ちあがる。



南側壁面拡大部分（東から） 上層でローム、中層の白い部分は粘土。堀底は砂層。



図版 4



1号堀を崖下から臨む。
壁の立ちあがりは、北側で角度をも
って、南側でやや緩い。



1号堀拡大部



2号土塁、1号堀の位置関係から、
屈曲部の造成も築城後のある段階の
土木工事と想定される。





図版 5



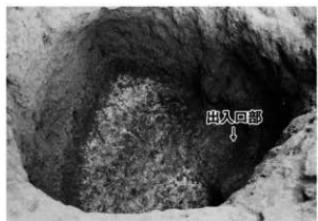
04P 土層断面

下層のローム塊は、天井が崩れて落ちたものである。



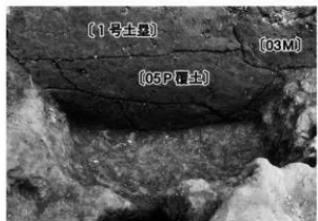
04P 全景

壁面は、底面に至るまで抉られており、ドーム状の室を形成している。



04P 全景 (部分)

坑底は、白色粘土層まで掘り下げられている。底面の平面形は不整長方形である。

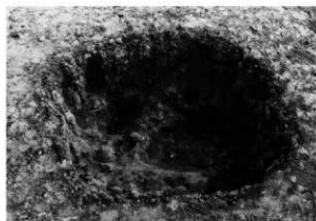


05P 全景

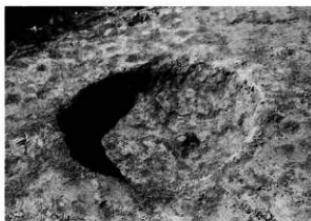
05P が埋まり、1号土壙が造られ、後世03M（溝）が両者を切っている。



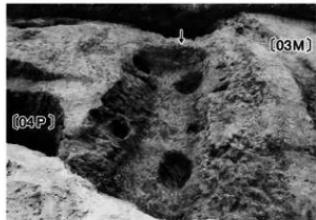
図版 6



13P 全景

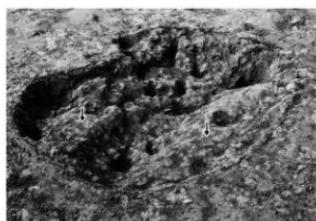


11P 全景



02M 全景 (東から)

↓部分で立ち上がり西側で土坑に切られる。底面及び壁面に等間隔でピットが掘られる。



14P 全景 (南から)

↓部分の両側で浅く、真中で、深くなっている。



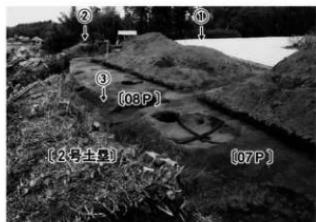
(04M)

2号土塁土層断面 (東から)

土塁基底部は、表土下部で整地し、ローム土を核として積み上げている。



図版 7



調査区南側全景（南から）

- ① 1号土壠
- ② 1号台状遺構
- ③ 04M溝状遺構



07P 全景（東から）

上の全景写真中の07Pは粘土部分を帯状に掘り下げたものである。



08P 全景（南東から）

04Mを切る。底面及び壁面の一部が強く焼けていた。



1号台状遺構周辺（南東から）

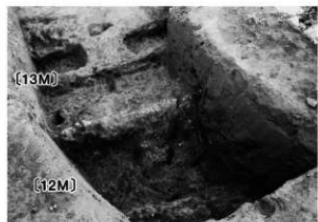
1号台状遺構（①）に接してないしは重複して、溝が検出された。

- | | | |
|------|---|---|
| ②04M | 旧 | 新 |
| ③08M | | |
| ④10M | | |
| ⑤06M | | |
| ⑥05M | | |
- ③・④→⑤→⑥





図版 8



12M・13M全景（北から）

手前から12Mの粘土部分。13Mの溝部分と土坑状掘込み
2カ所である。軸は、ほぼ同一である。



13M全景（東から）

右端白い部分は12M上場。土坑状掘込みと溝は土坑側から溝に向かっており、同一の遺構と判断した。



12M全景（東から）

上辺に白色粘土を貼り付けている。底面には見られない。

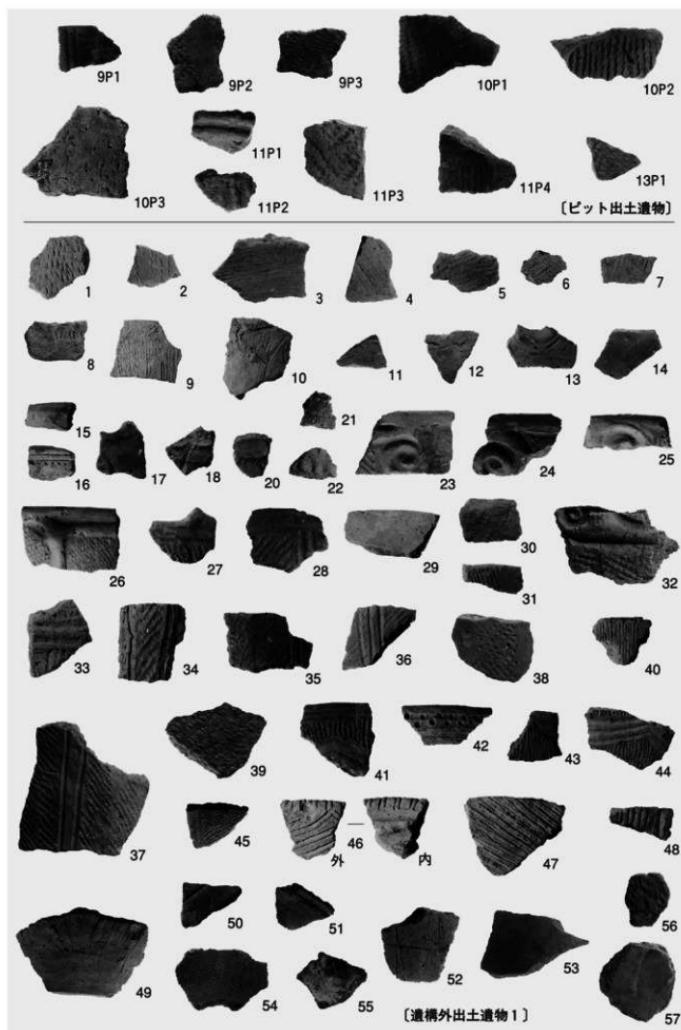


15P全景（南から）



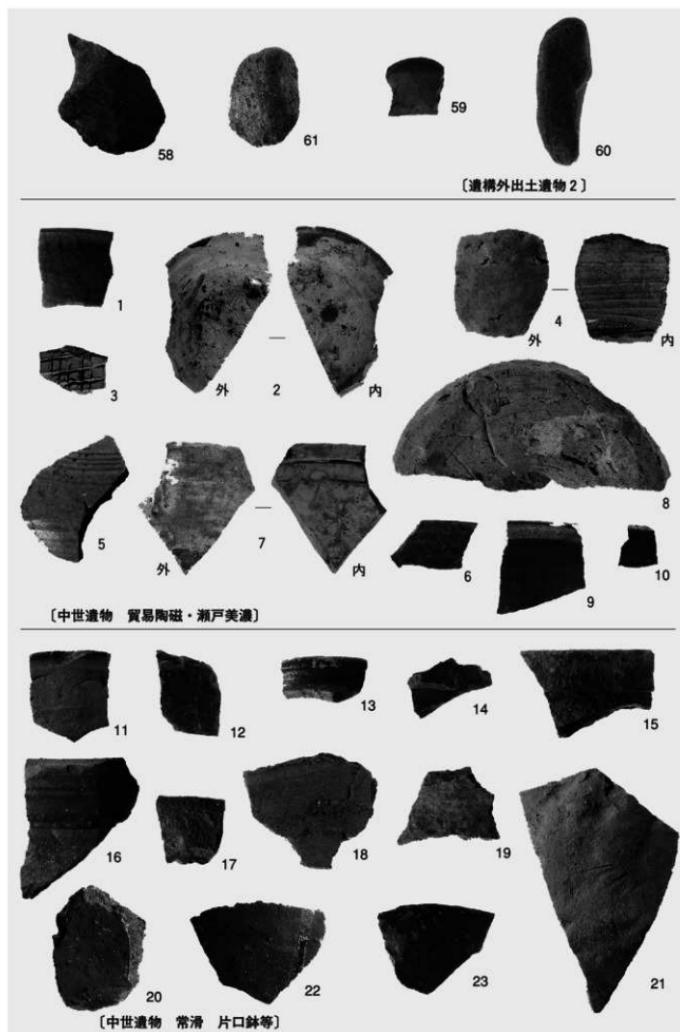


図版 9



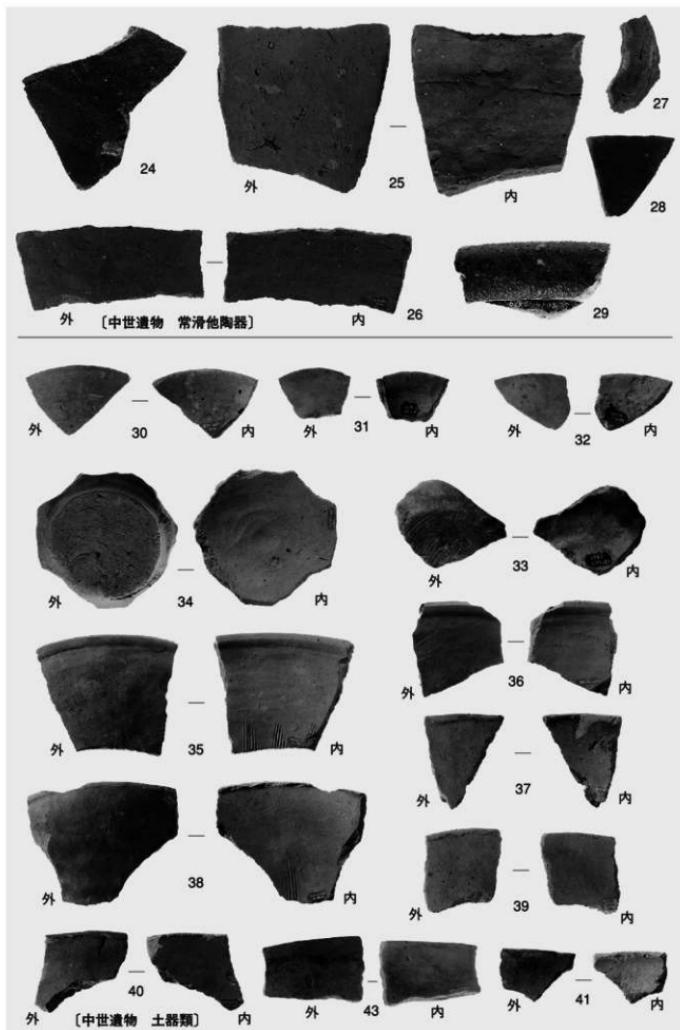


図版10



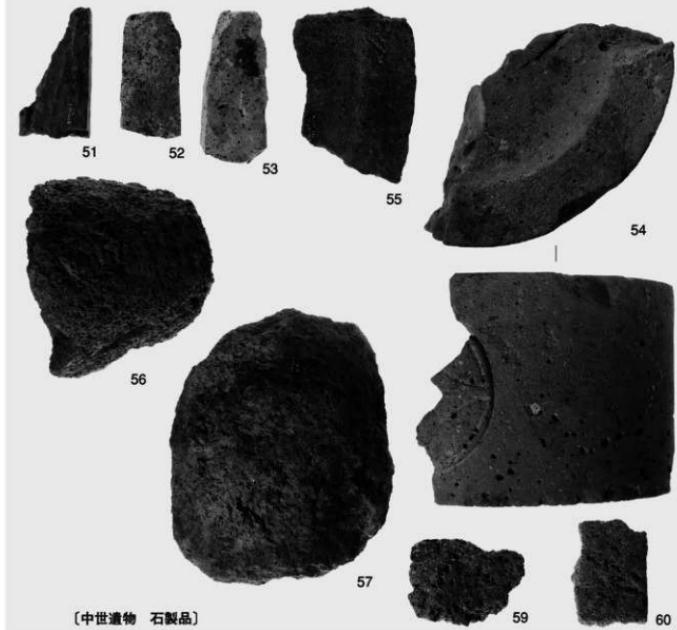
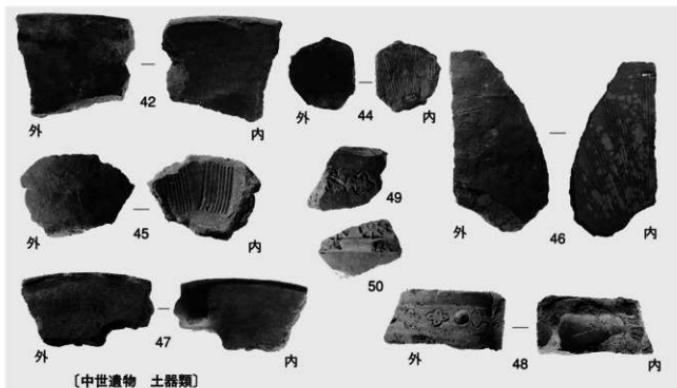


図版11



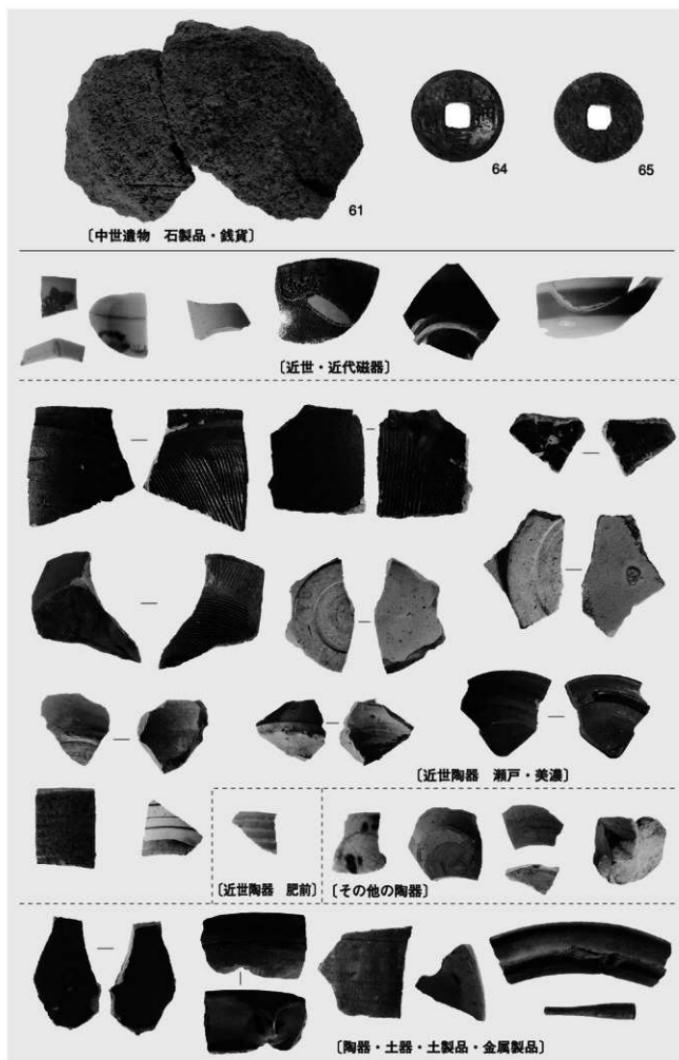


図版12





図版13





報告書抄録

ふりがな	ちばけんやちよし みょうけんまえいせきびーちんはっくつちょうさほうこくしょ					
書名	千葉県八千代市妙見前遺跡b地点発掘調査報告書					
編著者名	森 龍哉 中野 修秀					
編集機関	八千代市教育委員会					
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 TEL047(481)0304					
発行年月日	西暦 2008年(平成20年)3月30日					

所取遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積m ²	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
妙見前遺跡b地点	八千代市吉橋字妙見前 1430ほか	八千代市吉橋字妙見前 1430ほか	12221	133	35度 44分 34秒	140度 5分 12秒	20050301 ~ 20071126	1050m ²	急傾斜地 対策工事

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
妙見前遺跡	種別	縄文時代	ピット		縄文土器		b地点	
b地点	城間塹	戦国時代	土塁		青磁			
	道 跡		台状造構		瓶戸・美濃陶器			
			地下式坑		常滑陶器			
			火葬施設		在地土器			
			粘土貼り土坑		石製品 砕石、茶臼、硯			
			土坑					
			溝状造構					
			堀					

要約

千葉県開発事業に先行して八千代市が受託し、発掘調査を実施した妙見前遺跡b地点本調査の発掘調査報告書である。

検出した遺構は縄文時代では中期ピット5基である。本遺跡は中世吉橋城の築城に際して大規模な土木工事を実施している。そのため、本来の基本堆積層がカットされ、そのカットされた部分に遺存していた中世以前の遺構は消失している。縄文時代の遺物については早期撫糸文期から前期・中期・後期の土器等が出土しており。該期の遺構が展開していた可能性が高いと判断される。中世戦国期では、吉橋城の間塙施設として本城から350mという位置関係にありながら、防衛施設としての土塁や幅10m、深さ4.4mの空堀が検出された。また時期を前後して、幕域の一端を示す火葬施設の遺構や作事にかかる区画溝が検出された。

遺物は陶器陶磁器や瓶戸・美濃陶器等の豪奢品や常滑窯陶器。在地土器等の生活に密着した土器類が出土している。石製品では茶臼、硯や砾石等多種に亘る。これら遺構や遺物の出土状況から、吉橋城としての城域が当初想定した範囲より広がる可能性が高いと判断された。

千葉県八千代市

妙見前遺跡b地点発掘調査報告書

急傾斜地崩壊対策工事に先行する埋蔵文化財発掘調査報告

2008(平成20年)

印刷日 2008年3月28日

発行日 2008年3月30日

発 行 千葉県千葉地域整備センター

編 集 八千代市教育委員会
